日本書紀傳

十四卷

修

和書
一〇五二二號

三十一

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (40)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教育者文庫印
内閣文庫
宮内省図書寮文庫
内一二六八三號

第十

日本書紀傳十四之卷

神代上第十二　四神出生章　穂積重亂　譜撰

一書曰伊弉諾尊勅任三子曰天照太神者可以御高天之原也月夜見尊者可以配日而知天事也素戔嗚尊者

可以御滄海之原也既而天
照太神在於天上曰聞葦原
中國有保食神宜爾月夜見
尊就候之月夜見尊受勅而
降已到于保食神許保食神

乃迴首嚮高國則自口出飯又
嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出
又嚮山則毛麤麤毛柔亦自口
出夫品物悉備貯之百机而
饗之是時月夜見尊忿然作

色曰穢矣鄙矣寧可以口吐
之物敢養我乎迺拔擊殺然
後復命具言其事時天照太
神怒甚之曰汝是惡神不須
相見乃與月夜見尊一日一

夜隔離而住

此八保食神の本傳なり皇祖天神の詔命ふ依て伊弉
諾尊伊弉冊尊二神大八洲國を産成し給へるハ大地
萬國の始なり八百萬神を生出給へるハ天下蒼生の
始なり皇祖天神より事依し奉ると也給ふ大事此ふ竟
て伊弉冊尊ハ根國底國の方ふ神避り幸行し伊弉諾
尊ハ登天報命して日之少宮ふ留宅ミ給ふ頃なりひふ
ハ成ふたり故天照太神ハしも已く御父母二神の事
依し奉給へる詔命の任ふ高天原を所知食し御在し

坐けるふ速素戔嗚尊ハしも此滄海原潮之八百重と
云て此顕國を所知食べき神と事依され奉給ひしゝ
ども八拳須心前ふ至ろ迄ぬ泣哭給ひて此國を所知
食ず御在しゝ坐しゝかバ其御父大神の問給ひけるふ吾ハ
母國根之堅洲國ふ罷ゝむと欲ふと申給ひしゝりバ心
の任ふ往ねと宣給ひけれバ然ゝバ天照太神ふ請し
て罷去むと申して天上ふ参上ゝ世給ひけるふ其時
ふ御心の赤き事を明ゝめ申給ハむとして御誓の事
共有りき此ふ其御誓の御中ふ天忍穂耳尊生出さ世
御在しゝ坐しゝりども其物實を以て云ふ時ハ皇太神の

御子ゝ渡ゝせ給ふが故ふ日神の皇太子と成し奉ゝ
世給ハゝ然れども素戔嗚尊ふ御子ろろを以て吾
兒と宣給ハゝ事實叙出現章第五一書ふ所見たろ
が如し通證ふ夫根系統脉在父而不在母知五男則日
神猶父也素尊猶母也物根固出子日神非日種
而何耶と云ろハ是即天孫降臨章第二一書ふ天照太
信ふ然る言ふゝり
神手持寶鏡授天忍穂耳尊而祝之曰云ニ又勅曰以吾
高天原所御齋斎之穂亦當御於吾兒と見え第一一書
ふ天照太神因勅皇孫日葦原千五百秋之瑞穂國是吾
子孫可王之地也宜ふ皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當
與天壤無窮者矣と記さ世給ハゝが如く天照太神ふ

事依され奉給ひて此豊葦原瑞穂國ふ都敷き給ひて
天下萬國を所知食す遠皇祖の神尊ふるむ御在し坐
けるゆゑふ此天下ハ已ふ二柱御祖神より素戔嗚尊
ふ授奉らせ給へる國なり然るを天照太神の大御正
統ふて如此く所知食す御事と成てハ二柱御祖神の
豫定め置せさせ給ひし御事任しハ徒事と成るが如
くなれども然れ非ずと已ふ傳ハ二十一丁ふし說るが如く
其始第四神出生章ふ既而伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰吾
已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟於是
共生日神云ニ次生素戔嗚尊云ニと有て共ふ天下之

主者を生むさして生成奉らせ給へるが其天照太神
ハ光華明彩照徹于六合之内と有が如き靈異なる大
御子ふ渡らせ給ハバ高天原を所知し令坐奉給ふ神
隨の御事なれ次ふ月讀尊ハ後ふ素戔嗚尊の月神と
成給へる御名なれバ此列を除く可く蛭兒ハ神ふハ
非ず八洲起元章第一一書ふ載れる其正說なれバ此
列を亦除く可きなれ然れバ四神とハ申せれども實
ふハ天照太神素戔嗚尊二柱ゑ此時ふ生坐し珍子ふ
渡らせ給へりける此ハ故翁の古事記傳ふ始て其說
ふ委しき論共有て被定たりしゆゑ猶未盡されず
る事耳多在るを予慥ふ見定つる事有て傳ハ卷らり

物〳〵初て次ニ十四卷ふ然れバ受張て天下之主者と
至る迄說註〳〵たるなり
申す八素戔嗚尊ふ渡らせ給へども御母神ふ屬奉り
せ給ひて根國底國ふ往坐す可き然る可き故由の有
けむ其故ふ御父大神より逐ふ神逐ひふ逐ハれ奉り
せ給ひて實ふ顯國ハ主無き國の狀ふなむ成れりけ
る然るを皇祖天神の神量らせ給へる御旨かどもや
有けむ又伊弉諾尊の所思〳〵食〳〵定させ給へる御事
もや有けむ瑞珠盟約章ふ於是素戔嗚尊請曰吾今奉
教將就根國故欲暫向高天原與姉相見而後永退矣勅
許之〻〻如此有が如く素戔嗚尊の然所思〳〵成るとゝひ又

然許可〳〵給ふとゝひ實ふ神隨の御事ありなと竟して
終ふ天照太神と御誓〳〵給へるふ依て天忍穗耳尊ハ
生出させ給ハり〳〵ばふ共ふ彼何不生天下之主者歟と
宣ひて二柱御祖神と珍子と生成〳〵奉らせ給へる天
照太神素戔嗚尊ニ神の御子ふ渡らせ給へバ此ふ於
て此顯國を所知食す可き皇御孫尊と定り給へるハ
右の如き深き由緣有る事ふなむ有ける然れバ月讀
尊も共ふ其列ふ在て抱ハらせ給ハず又天統の御上
ふ係づらハせ給へる御事の少くも見えざるハ全く
素戔嗚尊と同ト一神ふ御在〳〵坐けり證據此ふ在る

事右の文ふ照〳〵讀て味ハひ知〳〵る〳〵事ふるむ有け
る此迄の文此ふハ用無き事の如くなれども此瑞穂
國を如何〳〵て皇御孫尊の所知食す御事ぞと云事
の心ふ入〳〵ぬ限ハ此一書の所由を知ばり〳〵ず又素
戔嗚尊月讀尊同神なりと云事を知ざる限ハ又此一
書の然る由緒を知ふ手著侍此ハ其天忍穂耳尊の御
無きが故ふ今如此云なり

生坐るふ就て天照太神の大御心ふ天降し奉りて初
國を所知〳〵令坐奉らせ給ハむ頃ゐひるかけしば此
國土を安け〳〵平〳〵けく統御させ奉らせ給ハ
むふハ其御め給ふ天下蒼生の食て活べき物著て暑
寒ふ堪べき物住て家居雨露凌ぐる可き物謂ゆる食物衣服住
宅の三物無してハ得侍べからまじく所思〳〵成給ひ

ける即素戔嗚尊を大御使として天降し奉らせ給へ
るなるが其大神ふ月夜見尊と申す御名坐るふ就て
其月夜見尊と云方ふて傳ハゆたり〳〵者なり此ふ亦
故有べし上ふ伊弉諾尊勅任三子曰云素戔嗚尊者
可以御滄海之原也と云ハ大綱を云文ふて下ふ小目
して其三子の御上を云む析なり然るふ天照太神月
夜見尊の御事耳有て素戔嗚尊ふ係る文無きハ疑ふ
可き一なり又可以配日而知天事也と云ハ正書ふも
其趣ふ見えたる事ふれども外の二例とハ違ひて甚
ニ言痛くして上古の言語の狀ふ非ず此亦其疑ふ可

天照太神者月夜見尊者可以配日而知天事也

ヲ二ヨリ下ニ乃與月夜見尊隔離而住ト有ハ其可以配日而知天事也ト云文ニ照應セラガ其ヨリ日月ハ夜晝ト隔離レテ住給フ事ト成タリト云ム計の文ヨレバ其疑を容ラ可キ三ヨリ此ニ依テ推究ラニ此モ古事記の如く素戔嗚尊ト有つゝむを其亦御名ニ依テ月夜見尊ト申ス傳ハ別リシラズモ其神ト日神ト御事の有て磐戸隱の御事ヲズモ有シラバ其を日月の隔離たる事ニ取成しつるが終ニ實事の如く成て後ニ此御紀を記サセ給フ程ニハ終ニ可以配日而知天事也ト云フ頗シタヽヨリある漢風の勅任の御詞ハ加ハレル

ふるむ有ける又此を以て推すニ正書モ此モ天照太神ト素戔嗚尊ト二子ヲるるが上ニ其亦名を別ニ一神ニ擧て終ニ三子の數ニハ強て合せたる者ヨリある也見えたりける 此ニ依て他の事實を又見合するニ第一一書ニ即天照太神ハ月弓尊ニ 故使照臨天地ト有ハ天ト地トを事依し給ハる事ト見て足ぬ可し其次ヨリある素戔嗚尊ニ勅任の事無キハ其同神たるが故ヨリ第二一書ニ右ト同ジ可し第六一書ニ月讀尊者可以治滄海原潮之八百重ト也素戔嗚尊者可以治天下也ト有テハ上ニ御名の異ある耳ヲレバ同神ヨリある事云モ更ヨリ又此一書五書ヨリある月夜見尊の御勅任しハ決ニ信け難く又古事記ニ次月讀命汝命 者所知夜之食國矣事依也ト有モ素ヨリ後ニ出來レる傳ヨリ如此くニ一ニ究メ以行く時ハ實ニ珍子ハ二神ヨリでハ御在し坐ざる者を如何ニ爲む故此傳の位置ハ何處ニ在べきぞト云ニ瑞珠

盟約章よりハ後寶鏡開始章らハ前ニ在べき文ニ
るを別ニ一章ニ立つ程の事ニて無く又勅任ニ子
云〻ニ縁けり文るがら故ニ此章の終ニハ有るべ古
事記ニハ石屋戸段の終ニ於是八百万神共議而於速
須佐之男命負千位置戸亦切髮及手足爪令拔而神夜良
比ニ比ニ夜良岐又食物乞大氣津比賣神ニ大氣都比賣自
鼻口及尻種ニ味物取出而種ニ作具而進時速須佐之
男命立伺其態爲穢汚而奉進乃殺其大宜津比賣神故
所殺神於身生物者於頭生蠶於二目生稲種於二耳生
粟於鼻生小豆於陰生麥於尻生大豆故是神産巣日御

祖御命令取茲成種故所避追而降出雲國之肥河上在鳥
髮地と右て一聯の文ニ見以て行くニ然ニ非ず上
聯
ある神夜良比ニ夜良比岐を兼て故所避追而云〻と
續く文ニて其間ニ在て更ニ用を成さ〻ず又食物
以下成種以上百十二字ハ何れよりか混れ來つる者
なり然〻ざれハ天ニて逐られさせ御在〻坐て出雲
國ニ降ゐせ給ふ迄ハ唯虛天耳ありて白雲の五百重ら
上の何處ニか大氣津比賣神ハ坐て食物を乞ハせ給
へることを爲ん故思ふニ其も天上ニ坐す程ニ在〻事
なるハ然ら物りゞ此一書の如く其御天降坐〻事實

あらく能も委しく傳ハらざりける故ふ右の百十二字許ふて文の牧の處の無りけもりふ此ふ入たるふてハ有べけれども此一書ハ餘りふ上ふ過ぎ彼ハ餘山ふ下ふ成り過して共ふ其正しき所在を得ざる者ありけり 古史徵ふ云彼記ふ須佐之男命天津罪の御荒び有て太御神天石屋ふ幽居坐て其を謀出て奉りて後ふ被具を負せ偖神夜良比尓夜良比岐又食物乞大氣津比賣神ふ云こと記連れたる此又字ハ前件云この惡事を爲給へる事實を受て又斯る惡事有しと云事を新ふ語出たる又字ありと云れたるハ然其ハ此一書の末ふ于時天照太神喜之曰ふ事なり

是物者則顯見蒼生可食而活之也乃以粟稗麥豆爲陸田種子以稻爲水田種子又固定天邑君即以其稻種始殖于天狹田及長田云こと有ハ其物の出來始め又其を殖始給ふ事の起りを云文なるが寶鏡開始章ふ是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀何則天照太神以天狹田長田爲御田時素戔嗚尊春則重播種子且毀其畔秋則放天班馬使伏田中云こと有ハ固より同じ正書なれバ瑞珠盟約章より續きたる事ハ論も無き事なれども其凡ての事實ハ此の一書より全く續きたる文なる事合せ讀て曉る可し又此を以ても此の月夜見尊ハ彼ふ見えたる素戔嗚尊の御事なる由相照して見てバ弓が上ふ云説の違ハざる事自然ふ灼然りなる

む者ぞかし如此くに正書と一書ハ一紗るゝぬ物の如
くなれども又續く文脉も有る者ふるむ有けるが然れ
ふ月夜見尊と有ハ何も辟事と云ふハ非れども此を
兼たる右の正書又古事記るとふも共ふ素戔嗚尊と
有るも信ふ正しりめ可き然るハ月夜見尊と申す
ハ此ものハ遥ふ後ふ根國ふ入給ひ後ふ月國へ御身
の分れ幸行る後の偖此ふ保食神と申すハ傳十三十
御名ふ在ればるめ
ふ云る如く第六一書ふ又飢時生兒號倉稲魂命と有
て其を伊弉諾尊の御子と云ハ誤ふて第二一書ふ即
軻遇突智娶埴山姫生稚産靈と有る其稚産靈神を古
事記ふ亦伊邪那岐命の御子の列ふ收たるも混ひた
る傳るゝ次和久産巣日神此神之子謂豐宇氣毘賣

神と有ふて其御系統明らかなる者なれ保食神と申
すハ其亦名ふ御在し坐て火神土神の御孫ふ渡ら せ
給へり然るふ第六一書又古事記の如く天照太神素
戔嗚尊なるゝ其御身滌の時ふ成坐し神ふ御在し坐む
ふハ此二神ハ火神土神よりハ遥ふ後の神なれ又稚
産靈神保食神ふも然れ若其如くバ然計の神の御事
を二神共ふ豈所知食ざらむや然も有るむふハ外く
しく聞葦原中國有保食神るゝくハ詔給ふまじき筈
の事ふ非ずや此を以ても皇太神の高天原を所知食
し初させ給へるハ二柱御祖神の相共ふ物爲給へる

へり〻事正書の傳の如くにして第二一書に日月既生と有る其より後に火神土神は生坐る趣の正實なる事微〻知るべき者あり此は上にも云る如く保食神の本傳にかゝる二柱の珍子等の陰陽二神の相共に産成〻奉る世給ふ事も知られ晝夜見尊素戔嗚尊を別神と立るは中世の文者の杜撰に起り始れる事も知られ又其二大神の火神土神よりは以前に已に成坐る御事をも明らめ知るべき上は御身滌の時に生出坐るあらざる事を曉り得つべき傳ふて有るべき是即ち此一書に就て大に得たる所ある者なるべし

此如

〇十一

〇寶叙出現章第五一書に吾兒御子之國に有て此と同〻きこと

〻正〻明らめ以て行〻時は少しも彷彿らずして眞に古傳は古傳と見え分るべき者なれば何ぞ他書を瑣〻〻引集めて云に及ばむや〇勅任三子は第六御紀は御紀を以て徴し說べき可し〇一書に出傳十四百六十六丁〇高天之原は之字加はれる耳にて異なる義無〻例は道饗祭詞に高天之原に事始遷却崇神詞に高天之原に神留坐と云に高天之原に始志事云こなど有り如此く唯高天原と書るべきは御紀の文法なるを所に依て如此も書さるべき事は其傳たり〻〻本書に在の任に記されたるなり〇御字は第六一書に可以治高天原也有る治字と其訓も義も等〻此字天孫降臨章第二一書には以吾高天原所御齋庭之穗に當御於吾兒とも用ひて御自の御上に屬ては

伎許斯米須と云ひ其依し奉る方に屬てハ麻加世麻
都良武と訓り共に甚く雅びたる古言なり又袁佐牟
と訓べきハ本らの事なるなり（名義抄に行ヒヲ字の訓に袁佐牟とも
意富武とも都加佐枳流とも登に能布とも牟加布とも
也佐夫良布とも能流とも宇奈賀須とも阿何賀牟とも
猶種々に訓るを此に用ひべき耳）然れバ御小麻加須
と今引り其意富武ハ大御（ユダス）なり
の義有べし人に物事を委任る事を常に然云る是か
り万葉二三十四丁に天下治賜食國乎定賜等鳥之啼吾妻
乃國之御軍士乎喚賜而千般破人乎和爲跡不奉仕國
乎治跡御子隨任賜（ミヤヅカヘバ）者三十五丁に大王任（マケ）乃隨意云々と
有に大王之御命恐云々と有に和へて任と云るなり

大王乃麻氣乃能麻久
ニ又ハ二十丁

十三丁十九に天皇之遣（マケノ）之萬（マヒマヒニ）に夷離国治に登十八丁
に於保伎見能等保能美可等に未伎太末布宜乃末に
末又三十丁於保伎見能麻伎能末に三等里毛知底都
可布流久に能二十三丁六丁大王乃麻氣乃麻に麻に島乎
に和我多知久禮婆るど有り又續紀第一詔に四方食
國乎治奉止任賜幣留國ニ宰等に至麻豆と見えたるか
ど何れも物を委任（ユダヌ）る由なり然るハ京官の人にハ日
に大朝廷に侍ふ奉りて其御命を萬に受賜ハる
を京外の官人ハ然る事も出來まじきが故に大抵の
事ハ委任ぬ遣ハさるこ者なるが故に此を拜すを任（ニヤ）

賜ふと云ひ言義ハ令身向ふて其有る限りハ悉く令
役め給ふ謂ふる可し詔詞解ふ此ハ諸国の司を云ふ
さして任賜ハる宰と云るハ令罷を切めたる言ふて其国こへ罷しせ給ふ由ふ
ひ然れば任を麻氣と訓べし麻氣
るひ云こと云れたる其説ハ然る言ふれども令罷と
云れたるハ此言の物を委任る由
ふ起れる事を思漏されたるひ○配日ハ第六一書
ふ其光彩亞日可以配日而治故亦送之于天と有ひ傳
八六十四丁ふ已ふ註るが如く此ハ上天ふ日と月と相並
ひ懸れる如く見え旦万葉三十三丁ふ久堅乃天歸月乎
七四丁ふ久方乃天照月者神ふ加出反等六云二十一十丁
ふ久方天光月隠会者云二十五十七丁ふ比左在可多能安

麻豆流月波見都禮枵毋と有て實ふ天中の一象物ふ
るが故ふ月神も日神と配びて天上の事を所知食す
事と僻心得して然る詞を係たる者ふひ其ハ上丁ふ
も辨ハたるが如く此一書ふ素戔嗚尊の御事を月夜
見尊と有るゆゑ一日一夜隔離而住と云事も出來又
其ふ就て如此く配日而知天事也と云事も出來れる
ふて此一書ふ起りて正書ふ迫及べる僻事るひ然る
ハ月夜見尊と申すハ月夜持と申す義ふてころ有け
れ天を知と云ふ神ふハ坐す天を知る神と申すハ天
照太神ふ限れる事無仁天皇二十五年御紀ふ所見た

る倭大神の御誨ふ天照太神悉治天原と有を以て餘ふ
ふ論ひ無くあむ有べき此顕国の盡夜の事ハしも日
御在〳〵坐せバ配日とも神と月神と特別て所知食し
ら月神ハ月をころ所知せ天を知すと云理の無れば
配日と云ハ後の云ハぐ云ろ可き狀あり
杜撰あり事勿し○天事ハ正書日神の所ふ自當早送
于天而授以天上之事と有ろ天上之事ふ同じく又其
訓も一ふろ所あり然れども月夜見尊ふハ當〳〵ざる
可し然るハ天と云ハ日の事ふて正書ふ生日神と有
る下ふ天照太神又天照大日孁尊と見え神武天皇御
紀ふ今我是日神子孫而向日征虜此延天道也と云ふ
大御命有り又古事記ふ皇御孫尊の御事を此の天孫

ふ當て天神之御子と記され日代宮段歌ふハ多迦比
迦流比能美古ミ有を始として万葉ふ多く見え其一
ニ十ミ丁ふ高知也天之御蔭天知也日御陰乃云こと並云
ひ二ニ十六丁城上殯宮之時歌ふ久堅之天所知流君故ふ
云こと有を其一ふハ我王者高日所知奴と有が如く
天ミ云へバ日の事なり日と云へバ天の事なり共ふ
一物なる事已ふ傳三ニ十四丁ふ云るをも思合す可し然
れバ月神ハ日神と共ふ天日ふ坐て其御前の事なざ
を執持給ふ神ふ坐ざれバ知天事と云事ハ物事の明
るき吉ふハ且てし云ざり事今云ふ限ふ非ろなり

上ニ云ヘル天照月ノミトハ唯天中ニ照ル月ト云事ニテ
其天事ノミトハ異ナリ思ヒ混ヘ可ラズ菅家名義
抄ニ天事ヲ意富夜祁基登ト有リ公事ト訓ヲ等シク
爲ルヲ此ノ字ノ訓ニテ日神ニ配テ天上ノ公事ヲ所
知食ス意ノ舊キ説ノ有ツルニ依レルヿヲ思ヒ此
ル亦信ガタカレズ何レニ在レ月神ノ天事ヲ知ト云事
ハ古義ニ非ル事右ニ註セルガ如シ或説ニ知天事猶
之知事也ト云ルノミハ殊更カル非説カリ知太政官事
事ト云事ハ續紀ニ慶雲二年九月壬午詔二品穂積親
王知太政官事又養老四年八月辛巳朔甲申詔以舍人
親王爲知太政官事ト有テ太政官ハ大臣以下ノ官カ
リ親王ハ大臣ノ職カラズレドモ其中ニ交ハラセテ
其官事ヲ令知給フガ故ニ知事ト成シ給ヘルニソ

有ケメ同ジク其宣ノ事ヲ管領スルト云ヘル有ベ
シガ假令太政官ニ當ツトモ知事ニ當ツトモ月
神ノ御事ニハ更ニ允當ル可ニハ非ルカリ○滄海之原ハ古事記ニ次詔建
速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也ト見エタリ
然レドモ此ハ甚ク事略タル傳ニテ海神ノ知セル海
原ノ事ト一ニ成テ甚ク混ルハシ等六一書ニ月讀尊
者可以治滄海原潮之八百重也ト有ガ如ク云テトテ
此天下ヲ總テ云称ニハ成ル可キ事カリ其説傳十四百
七十ニ註ルガ如ク若テ彼一書ト此ト其神ハ異カル
ニ其事依シ給フ處ノ同ジキハ其神モ亦同ジキ證ト
ハ成レル事條ニ云ルガ如シ然ルハ月神ノ御依シ

の事の所見たるハ右の一耳ふて其他ハ何れも思束無き事耳なり正書又此一書なるなどハ全ふ古義ふ非る事已ふ右ふ云るが如く第二一書ふ大日孁尊及月弓尊並是質性明麗故使照臨天地と有も素戔嗚尊への御任しふ故今下治根國と甚く後の事を引上て記されたるを思へバ是將憶ふる傳とも思いれざれバ其も唯日神月神ふ天地を依し給ふと見て有ぬ可し唯古事記ふ所知夜之食國と有る耳一節有とハ思ゆる物りふ其も亦後ふ夜之食国を所知看す月神と成給へる傳を引上たる者ふる事決し旦月神とハ申

せざも其正實ハ此大地を所知食す素戔嗚尊ふ渡ら世給ふ確ふる證ハ顕宗天皇三年御紀ふ阿閉臣事代御命出使于任那於是月神著人謂之曰我祖高皇産靈尊有預鎔造天地之功宜以民地奉我月神若依請獻我當福慶云ここ有る是ふり若別神ふて此國土を唯思す耳の月神ふ坐もふハ天地を預鎔造しせる故事造を然計り変しく宜ハでも有ぬ可きを若此御誨坐るふ就ても所由無ふじやハ其事代の使せる任那ハ韓地ふ屬たる處ふる事を心留置て寶劔出現章を閲る

ふ第三一書ふ蛇韓鋤之劔とえふ目有り第四一書ふ

素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國云々と見え
第五一書ハ素戔嗚尊曰韓郷之嶋是有金銀云々と有
り彼御論ハ其任那の事ハ就て有けるとこれ三々を思
合せ〳〵バ月夜見尊と申すも素戔嗚尊と別神ハ非
る事を悟り得てむ〳〵猶欽明天皇十六年御紀百濟
卿を以て王子恵ハ令諭給ハく昔在天皇大泊瀬之
世汝國爲高麗所逼危甚累卵於是天皇命神祇伯敬受
策於神祇祝者廼託神語報曰屈請建邦之神往救將亡
之主必當国家謐靖人物又安由是請神往救所以社稷
安寧原夫建邦神者天地割判之代草木言語之時自天
降來造立国家之神也頃聞汝国輟而不祀方今悛悔前
過修理神宮奉祭神璽國可昌盛汝當慎之有り是ハ
玉勝間　巻ハ此文を引れたる所ハ建邦神々云ハ
素戔嗚尊の御事なる由ハ云れたるかむ右ハ引る文
共ハ合ひて實ハ然る言かり故此等の事共を思合せ

て右の月神々有ル素戔嗚尊を
申奉れる御事を思定む可かり○在於天上曰ハ事記ハ故各
隨依賜之命所知者之中速須佐之男命不知所命之國
而云々と有ゲ如く素戔嗚尊ハ所知す可き國をも所
知〳〵給ハずして空〳〵く御在し坐けるハ天照太神ハ
事依され給ハる高天原と所知者て任者さ御在し坐
す意を示むさむと云ふ意味ハて如此ハ書されたり
〳〵者々見ゆ在字麻斯ミ〳〵氏々訓るハ然る言かり古
事記ハ坐高千穂宮而議云又ハ坐畝火之白檮原宮治
天下也かどの文法多くして何れハも坐字を書るこ
同ト所るるかり已ハ此第十一書ハも伊弉諾尊追至
伊弉冊尊所在處々有る所在の字を

れ麻斯麻須と訓るなり故此在天上と有ハ在天宮と云ふ義なり天照太神の高天原ふ神留坐す大宮を天宮と云ひ又天津御門とも申す事なり又ハ日宮とも日之御門とも申せり其天宮と云事ハ太神宮諸雜事記無仁天皇二十五年條ふ皇太神宮勅宣依我天宮御宇之時天下四方國摂録可天下宮所放光明見定畫先畢仍彼所可行幸御之由宣又清和天皇貞觀十五年條ふ謹撿故實天照坐皇太神宮天降坐之時云ニ始從天傳來無止齋庭供奉職之氏也又東三條後朱雀院三年條ふ齋宮内侍託宣依我是皇太神宮第一別宮荒祭宮也而依皇太神宮勅宣今更所託宣也天下四方乃人民皆皇太神宮乃御寶也其中大中臣荒木田氏皇太神宮天宮與利天降坐時與利継氏継門天代ニ世ニ奉仕來補佐乃神民也と有て此四の天宮ハ皆神託ふ出たる事ふり大祓詞ふ天津宮事以氏云ニと有も天宮の事務を云事已ふ講義ふ説るが如く續紀天平勝寶六年の所ふ聖武天皇の大御母藤原夫人を千尋菖藤高知天宮姫之尊と謚し奉くせ給ふ事所見たり此ハ万葉ニ三十六丁ふ安見知之吾王高光日之皇子久堅乃天宮ふ神隨神等座者と有が如く身没たる人の靈の天宮ふ復

命す事の有を以て猶百練拔壽永二年條ニ近曾
祭主親俊奏法皇云參神宮平伏庭上父親定并親章卿
西人過去者在堂上以親定傳仰云於我者令向天宮給畢法
皇御事所令申付荒祭宮也（給）云々見えたるを以て其
事思合す可し（其奏）天報命の所ニ云べければ今註さず此
ハ唯天照太神の天上ニ所在す處を
天宮と申す事を云明らむる耳なり又天津御門と云
事ハ右ニ引る垂仁天皇二十五年ニ皇太神の鎮坐け
る所の倭姫命世記ニ云ふ時皇太神倭姫命乃御夢喻給
久我高天原ニ坐張戸押張原加見志麻岐國宮處波
是處也鎮利定理給止覺給支と有る張戸ハ備字朝廷（ミカド）

の意ニて右の天宮是なり万葉三十三丁ニ明日香乃眞
神之原ニ久堅能天津御門乎懼毎定賜而畏神佐枝跡
磐隱坐と有ハ其殯宮を然云るなり又二十七丁飛鳥之淨
之宮ニ神隨太布座而天皇之敷坐國等天原石門乎開
神上ニ座奴（云神登座ニ）と有と同じく此等も身能た
る人の靈の天津御門ニ參上て仕奉る事の有と云ふ
古傳ニ依て詠る歟ニて右の天宮の例ニ異なるず其ハ
ニ久堅之天所知流君故ニ日月毛不知戀渡鴨又哭澤短歌
之神社ニ三輪須惠雖禱我王者高日所知奴（と）有るを
を以て曉る可し北も
ニ傳十五卷ニ云べし又日宮と云事の仁明天皇嘉祥
二年三月御紀奉賀天皇寶算滿千四十歌ニ茜刺志天

照國乃日宮乃聖の御子曾鞆蒔乃天乃梯立踏建比云
こと有ハ正〳〵く右の皇太神の天宮とし也日宮とハ
申せるるり又古事記朝倉宮段天皇大御歌ふ多〻迦比
加流比能美夜比登と歌ハせ給ひ又三重媛が麻紀佐
久比能美加度と詠るるぞハ古語拾遺ふ宣太玉命率
諸部供奉其職如天上儀と有が如く惣て天神御子の
御ハ何れも天上の儀を摸されたる者なるが故ふ日
宮又日之御門とハ申すふぞ有けふし冠辞考ふ右の歌共を引て其
説ふ真木柱の檜とハ云ハ日之御門ふ云轉したり継体
天皇御紀ふ葦紀佐倶避能伊陀圖塢と檜と耳云續け
〳〵〳〵見てハ檜以て造れる宮門の事とも云べけれ
ども方葉一ふ日之御門と書たるるぞと合せ見るふ

此ハ檜を日ふ言係たるるり〇日云ニハ山蔭ふ此文
ときれたり貫ふ然る言なり〇日云ニハ在於天上勅月夜見尊日云ふ宜ふ就候之と有べき
を月夜見尊の在所如何と云れたり此文例を外ふ索
るふ天孫降臨章第二一書ふ因勅皇孫曰云ニ宜ふ皇
孫就而治焉と有て尓皇孫(イマシヲヤマノミコト)も申せる例有れば尓月
夜見尊とも申す可し斯れば上ふ其説の如く勅月夜
見尊の五字必有べき所なり然して其上なるい御紀
の地の詞なり下なる尓月夜見尊ハ大御言なり必如
此く無てハ得有まじき所ふなるも有ける右の如く尓(イマシ)月夜見尊又
尓皇孫なぞ云ハ古言の例ふて古事記白檮原宮段なる
天照太神高木神の大御命と汝建御雷神ニ詔給へる

例も有れど此ハ上ふ唯勅月夜見尊の五字だふ有るむふハ月夜見尊の在所を如何と云ふ疑ハ無ろ可き所ふるむ ○葦原中國ハ國號考ふ葦原中國ハ本天津神代ふ高天原ゟ云る號ふして此御國ふ〻〻云る號ふハ非ず偖此號の意ハ甚こ上代ふハ四方の海濱ハ悉く葦原ふて其中ふ國處ハ有て上方ゟ見下せバ葦原の廻れる中ふ見えける故ふ高天原ゟ如此ハ號けたるゟ云こと云ふたり故此號ハしも大八洲國の出來始りて後直ふ在けりと見えたり古事記黄泉國段ふ伊邪那岐命告桃子汝如助吾於葦原中國所有字都志伎青人草之落苦瀬而患憶特可助告賜

名号意富加牟豆美命と云ふ大御言ふ已ふ在けるを思ふ可〻〻記傳六ふ今此ふ天上ならず夜見国ふして云称を其住此方ふて也云習へる世ふ成て語傳ハし語ゟりと云れたれども其ふてハ此の意を取て語ハ別ふ製れる者の如く成れゟが然ハ非ろ可し此号の甚古くゟり有つむと所思しき由ハ此終ふ云べし偖此ふ天上ふ對へて葦原中國と所見たるを始として瑞珠盟約章第三ノ書ふ使取其六男云こ使治天原云こ三女神者使降居于葦原中國之字佐嶋矣寶鏡奴閑始章第三ノ書ふ故不可住於天上亦不可居於葦原中國ゟ〻見え又古事記石屋戸段ふ天照太御神見畏而閉天石屋戸而刺許毋理坐也ふ高天原皆暗葦原中國

悉闇因此而常夜往云ニ因吾隱坐而以爲天原自闇亦
葦原中國皆闇矣云ニ故天照太御神出坐之時高天原
及葦原中國自得照明ニ見え御天降段ニ居天之八衢
而上光高天原下光葦原中國之神於是有ニ云事見え
て如此く天上ニも天原ニも高天原ニも對ハ云称か
らを以思ふニ此大八洲豊葦原瑞穗之國ニハ異ニて
大地萬國を統て云名ニて有かりけり故豊葦原ニハ
云ず唯葦原中國ニ耳云り是其萬國を一ニ混りて云
ニ萬國の中ニり其眞秀かる瑞穗國を殊ニ抽出て云
ニの差別ある者ニり但瑞穗國ニ云ふ國號ハ彼齋庭
之穗を事依て授奉給ひて其皇

○第二書の傳世二卷二百十丁ニ

御孫尊を天降て奉ることを給へる後ニ起れる称かる事
天孫降臨章を說を以知べし其時迄唯大九ニハ葦原
中國ニ云ひ限りてハ大八洲國ニ云りて者ニかり然るハ大三輪三社註進次第
記ニ初伊弉諾伊弉冊二神共生大八洲國處ニ小島而
國稚如水母浮漂之時大已貴命與以彦名命戮力一心
殖生爲葦固造國地故號曰國造大已貴命因以称曰葦
原國ニ見えたる處ニ小島ハ此正書ニ處ニ小島皆是八洲起元章
潮沫凝成者矣云ニと有る其ニて傳六百五十ニ云る
が如く萬國の初ニ成る物ニかて其一ハ蛭兒かり其
一ハ淡洲かり甚始甚ふくて有けれが處ニ小島ニハ
云るかり此ハ皇國ニ限りて葦原國ニ云るが如くか

れども上ハ大八洲國別處ニハ島と有を承たるかれ
バ萬國の全を云るかり但萬國とハ云れども其始東
ハ蛭兒西ハ淡洲とニハ支別て漸ハ國形を成せるハ
皇國より西ハ蕃國耳有しかバ二神の古ハ僅ハ其
限狹くして今の如く悉ハ萬國ハ非ざりけるを追次ひ
て造ゝせ給へる者かり續後紀仁明天皇四十の寶筭
を奉賀歌ハ日本の野馬臺能國遠賀美侶義能宿那毘
古那加葦菅遠殖生志津國固米造ハ年與利云ゝ有て此
ハ處ニハ島の事を云漏せるハ歌詞かりけれバか
り國號考ハも此歌を引て說を成されたれども此ハ

依て葦原中國と云ハ皇國ハ限れる称の如く思ひ取
れたるゲ故ハ葦原と云と豐葦原と云との差別有る
事を思ひ脫されたりき遠西の戎共ゲ万國の屬地を
其一ハ阿自夜洲と云ハ皇國赤縣印度かゞハ其部ハ五ハ別て此を五大洲と云ふ
在て其五洲大の冠たり阿自夜と云ふ名義詳ならず
或ハ神聖首出の謂かりと云り予思ふハ阿自夜ハ葦
原と云ハ紹領の義ハて其を須弥の東北ハ在と云ろハ
皇國ハ當れるを長阿含經ハ諸大神妙天之所居此と
云れバ愈灼き者かり彼ハ知ずして蘊迷盧山の名を
傳ふるゲ如く荒西ハても何の事とも知ず古称の任
ハ阿自夜とハ云ふる可し神代ハ皇國ハ次て早く開
けたりしハ阿自夜洲かりけれども此ハ其始の名
を傳ハて淡洲と云ふ處ニハ島かり然れバ右の註進
次第記ハ日葦原国ハ阿自夜一洲ハ及べる称かり
事を知
ろ可し右の趣ハてハ大已貴命以彦名命の號け給へ

るに因て葦原中國と云ふ國號ハ出來たる如くなれ
ども然に非ず其始有る事なり其ハ傳七五十三丁に已に
註せる如く（此の芽）四神出二一書に次生蛭兒此兒年滿三歳
脚尚不立と有る脚ハ葦の借字なりつるが正字の如
く成れる者にして此國土を生成し坐し初未涅汲の
凝固しざりし程ハ先生出る物ハ葦なり薦菅も又續
て生ふ可きハ當然(カムナガラ)なる事なり釋紀にも肥美之地葦
草多生と有が如く其生立つと否ざるとを以て土
地の肥美(ヨキ)と瘦惡(アシキ)とを試給ふ事にし有けれが閑闢の
初人民多在らざりし頃なりけれバ未田を墾る

など云事も有ざりしかバ其葦原と成て叢々と生塞
りたる地ハ後世に可美國と成べき所なりしが故に
自然に嘉号と成て既く葦原中国と云称ハ二柱御祖
神の古昔より在て此にても然號け天上よりも其葦
原の中に在と云意を以て葦原中國とハ称けさせ給
へるなり然るに中にハ不毛の地なども有ければ悉
に然ハ非りけるを大己貴少彦名神の國土を經營し
せ御在し坐し時にハ其土地の狀を宜きに拵しへて
不毛の地をも肥美(コエツチ)として葦菅を殖生し給ひ二柱御
祖神の時にハ處々小島と云許なりし彼淡洲なども亦

ル迫ニ小此を弘めて葦原と成〳〵其國と成れしが又
海ハ墾出して（葦原と成〳〵給い）謂ゆる狹國者廣久峻國者平久と云狀
小島の八十島隙ろ事無く經營（ふ行）ふせさせ給へるが故
小更小葦原國とハ號けさせ給ハるふて其自然の事
小て名と成れるを殊小其造作（クミツクリ）を加へて愈其名とハ
定めさせ給へる故小寶劔出現章第六一書小見えた
る大己貴命の興言小ル夫葦原中國本自荒芒云〻ふ
と宣給へる者ふるをや然れば此葦原の葦別ハ神世七代章ふる葦牙ふゞ小ハ
本より係て云べき事小非ず二柱御祖神小始り大己
貴火彦名二神小定れる事を知べし但譬小在ル葦牙
と云事の有ハ此葦原と云事の甚〻止事無りしが故
ふる事を知べし傳五卷角機尊の下小云ふる事をも亦

考合す可ふむ○保食神ハ下小此云字氣毋知能加微と其訓
を註されたり此ハ第六一書小又飢時生兒號倉稻魂
命と見えたると同神ふて第二一書小即軻遇突智娶
埴山姫生稚産靈と有ふる其稚産靈神の御子小渡らせ
給ふ事古事記小次和久産巢日神此神之子謂豐宇氣
毘賣神と有ふる（其）豐宇氣と此宇氣と同じきを以て曉ふ
可し偖此の故事を上ハ小引ふる古事記小ハ大氣津比
賣神と有り下ハ小引ふる攝津風土記小ハ豐宇可乃
賣神と有り此等を合せて其保食神と申奉ふハ豐受
大神小渡らせ給ふ御事を明らめ奉ふ可き者ふり偖此

一書ニ其保食神の出自を記さざるハ右の如く第六一書ニ倉稲魂神と已ニ出たれバなり彼ニ宇カノと云ひ此ニ宇氣と註せれが其同神たる事灼然を以てなり和名抄ニ日本紀云保食神和名宇介毛知乃加美　保猶保持也宇氣者食之義也言是保持食物之神也と云ハ私記の説と聞えたるが實ニ然る言なり但宇氣を唯食の事と耳説來る事ニハ有れど也弟が説ハ傳九五十二十三十八丁ニ委しく説るが如く宇ハ生の省なる可く氣ハ毛ニて謂ゆる土毛を云なる可くして其毛の用途大凡三なり食物ニ爲べく著物と成す可く住宅ニ造る可し是即此豊受大神の土毛を産靈ひ給ひて天下蒼生を守給ふ所由なり其中ニも專要と有る物ハ下ニ天照太神の甚く喜バして是物者則顕見蒼生可食而活之也と詔給ハる稲穀なるが故ニ其重き方を以て氣と云ひ宇氣と云ハバ終ニ食物耳の事の如く成れりける者なりけり其ハ傳九傳十の巻ニ委しく註せれが今云ふ限ニ非るなり其土毛と云ハ土地ニ生出る木草の類を摠て云称なる事也其ニ已ニ云りき毋知ハ右ニ見えたる保持の義なり大忌祭詞ニ御膳持須留若宇加能賣命登御名者白と有も專其意なり又古事記ニ食物乞大氣津比賣神と見えたるも其御食を保持坐神ニ渡し也給ふが故ニ乞し給ハる者なり又攝津風土記ニ稲倉山昔止與呼可

乃賣神居山中以盛飯因以爲名又曰昔豐宇可乃賣神
常居稻椋山而爲膳厨之處後有事不可得已遂還於丹
波國比遲乃麻奈(葦地名)と見えたる其盛飯と云ひ爲膳
厨之處と云ひ共に其宇氣を保持ち給ふが故なり神
祇官に坐す御名を大御膳都神と申す事祈年祭詞に
見え又其を御膳魂(ミケツムスビカミ)神と申す事四時祭式鎮魂祭條に
見えたるが如く此大神は天津日継の瑞穗の神
に御在く坐て此大八洲国を豊葦原千五百秋瑞穗国
と名に称ふる事も此大神の御霊物を以て云なり皇
御孫尊の天下を所知食す天津高御座の大御業を天

津日継と称奉る事も此大神の御霊物の天齋庭の瑞
穗を日この御貢と聞食すに依れる御事なるむ有け
れば神はしも許多坐せども世中に在が中に甚も
尊く高き大神に坐が故に皇太神宮の外宮に今坐
今奉給ひて萬に皇太神宮と大低は同じ狀に持齋き
奉給ふ御事なり委しくは天孫降臨章第二一書に天
照太神又勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾
兒と有る所に就て其度會宮に齋奉るべき御事を申述
べき者なり此次に到(キ)保食神許云この所に至て其大
神の生坐しなり稲倉山に坐て本傳を説
べく其次に保食神實已死(ニ)と有る所にて其死坐ざ
る由を説べく又天熊人悉取持去而奉進之と有る下

〈御門祭詞ニ天能麻
我命ト登云神ノ名〉
〈傳二十五ノ山ノ名云〉
る如く寶鏡開
始章第一一書曰
ニ思兼神云者
第二一書曰ニ天稚
ヲ者又大玉者又
豐玉者又山雷
者又野槌者ニ
ど見え
る調をも記
傳ニ云神叙と
訓れた

ふて其大神の現御身ハ〳〵も上天ニ参上らせ御在〳〵
坐て皇太神の大御許ニ侍給ふ御事を證〳〵明〳〵め奉
る可く摠て予ガ始て云出る　○保食神の下ニ登云神
事ふて古說ニハ同じ〻らず（古事記ニ告此者謂葦原色許男命ニ有リ又）
ニ云語を添訓附べし　海宮遊行章第二一書ニ虛空彥
者歟ニ見え大祓詞ニ瀨織津比咩止云神云ニ速開都
比咩止云神云ニ氣吹戶主止云神云ニ速佐須良比咩
止云神云ニ〻ぞ有り本ニハ唯保食神有理登聞久ニ
古史微ニ此を取て聞有字氣毋智有ハ有ればもし其ハ俗びたる訓なり
神云者ニ云者のニ字を補ハれき　○聞有ハ有登聞志
米須ニ訓べし〳〵古事記八千矛神御歌ニ佐加志賣遠阿
理登岐加志毛久波志賣遠阿理登伎許志毛ニ有ニ同
じ續きかる所なり万葉四五十四丁ニ外居而戀者苦吾妹

〈示見之爲使之示次〉
〈寶鏡開始章
第三一書ニ宣急速
於底根之國乃共逐
降云〉
〈ニテ風俗好者命伊
麻世又評ニ認有神
曾好應祀入四〉

子ヲ云ニ里近有常聞乍六十六丁ニ海未通女有跡者雖
聞見ニ將公餘四能無者十三七丁ニ日向ニ行靡闕兵有
登聞而云ニ〻有り此等の下ニ見る事を何れも云
狀の同じきニ依て其例ハ此の就候之ニ有ニ其續ける
共を今舉るふ例む有ける　○宜ニ始ニ先云置て後ニ倍
志ニ訓むハ漢風の訓なりニ吾も人も然思ふ事ニハ
有けれども其漢字ニ然訓を物爲て再讀返る事ハ皇
國の古言の格ふて未有又未聞ざるどし同格の語なり
（應行又將來）
例公宜ニ尔皇孫就而治焉第二一書ニ夫汝所治顯露之
（天孫降臨章第二書ニ）
事宜是吾孫治之汝則可以治神事云ニ宜領八十萬神
（云ニ又ハ宜持天津神籬降於葦原中國ニ爲皇孫奉齋焉）
永爲皇孫奉護ニ尔ど所見たる宜ふて万葉三十九丁ニ此

汝天兒屋命太玉命

故與汝葦原色許男命為兄弟而作堅其国云々又

日者奈何好奈哉又七十六丁小好奈而亦還見六十七丁小好奈而安禮可弊里許年二十三丁四丁小好奈而早還來等ゐど云類ふて其言の首小此言を置て先云ふい其事を不足ぬ所無く成し竟る迄の事を係て言詞くふる辞と見えたり名義抄小宜字を與呂志又與志又麻佐迄又字倍奈理又加奈倍理ゐど訓り漢書小宜理當然也と云るをも考ふ可し○小月夜見尊如此く小某と云ハ其御命を令持て他小被遣る時小云言ふて天孫降臨章第一一書小皇孫云ニ第二一書小復天兒屋命太玉命惟小惟小諸神云く小二神亦侍殿内云ニ古事記白檮原宮段小天照大神高木神二柱神之命以召建御雷神云ニ故

吾今奉教將就根国云く

汝建御雷神可降大殿祭詞小汝屋船命小天津奇護言子以云ニ出雲神賀詞小汝天穂比命波天皇命能手長大御世子云ニゐぐ云類是ゐり如く小ゐ之も汝之も書ろ同じ事ゐり此等ハ那年遅と也訓て違ハざる所ゐれども猶伊麻斯と訓む方勝りたる可し此言義傳六ハ十六ハ十六ハ小云り右の大殿祭詞ゐる汝字を那年多知と訓るハ汝身等と云ふ事小ハ有れども伊麻斯と猶訓べきゐり○就候之ハ上ゐる宜字小合せて由伎氏美流倍志登詔給比伎と訓附べし就字ハ瑞珠盟約章小奈葉置當就文國而云ニ將永就字根国云ニ寶鏡開始章第三一書小衆神處我以根国今當就奈

〈海宮遊行章第七ノ一書ニハ當産時必就君處〉

云ニ寶劔出現章ニ素戔嗚尊遂就於根国矣ト云ヘリ種ニ
ニ訓ル字ヲリ偖上ヲル第十一書ニ往見ト有ハ御身
自往テ其地理ヲ見給ふるヲ此就候之ハ人ヲ遣シ
テ其向の消息を候ひ令省給ふふて自他の差有る事
ヲリ天孫降臨章ニ恠其久不來報乃遣無名雉伺之其
第一一書ニ於是從彼神謀乃使雉往候之ニ有ニ同ト
此ハ天照太神已ク高天原を所知食シ後ニ火神土
神ハ生坐シテ其御子稚産靈神其御子保食神ハ成出
坐テ其恩頼を國土ニ幸し御在シ坐けるを天上ニも
聞食テ其所業を候ひ令見給へるふて此ニハ幽深き

〈靈異記上ニ訓運公曰汝往省之奉詔往省實如聞有富霹靂雷霆之神矣還上奏之と有ハ此の文体ニ似たり〉

所由の御在シ生べき御事とるむ伺奉るれける（名義抄ニ扶ニ）
候字を字加賀布ニも佐年良布ニも年加布ニも毋登
年ニも伊多流ニも多豆奴ニも訓るをも考合す可シ
然れば甚可畏るハ有れども此を想像り奉るふ天地
初て判れて始て天日有り大地有りと雖も未其を所
知食す大君ハ定り坐ざりつるを二柱御祖神の珍子
ニ生奉らせ給へる此天照坐皇太御神ハしも質性靈
異ニ光華明彩シ〳〵大坐ニて天地の内ニ照徹らせり
けれバ天柱を以て天上ニ送舉奉らせ給へりけれバ
天日の四方八面を御照シ給ふ大御光も定りて後其
大地ニ照徹りて萬物の相結バり成る有狀を所知食

し給ハおく所思す時しも其より以前ふ火神土神の
相成し坐る其御子稚産靈神其御子保食神の成出坐
て其神業の成就へりしかバ愈見ま欲しく所思ふし
成て其神事の大較をも所知食して猶御力を副給ハ
む大御心ある此先其一ゐり其ハ天地の相交ハり結
天日の火ミ大地の土ミ相釀し成せるゐるを火神ミ
土神ミの御間ふ其神等の成坐るハ其体用有が故か
り若て其御力を副給ふ御事ハ其和魂を次ふハ上ふ
豊受大神の御詩ふ副奉給へる是ゐり
も云ゐ如し天照大神月夜見尊二柱の珍子ハしも其
始二柱御祖神の何不生天下之主者子ミ宜ひて生奉る也給へ
ふ坐ミせバ皇太神ハ其御徳の止事無く御在し坐す

ふ依て天上を所知食す太神ふてハ渡し世給へども
此顕國ハしも彼晝夜を持分て守し世給へるが如く
二柱ふて相持たせ給ふ可き當然ある所由有が故ふ
今茲ふ天忍穂耳尊を相成し奉し世給へる其を天降
して皇御孫尊ミ成し奉り天下公民を所知坐しめ奉
し世給ハむふハ天津日継の瑞穂を定め其を貢進る
を以て大御寶ミし其を所聞食すを以て天皇尊ミし
給ふ可き君臣の大義を定め給ハむ神策此ふ在て其
保食神を令候給ふふで有べき是即衣食住の事の起
りゐり此其二ゐり太神宮諸雜事記東三條後朱雀院
天皇御世條ふ七月十六日齋宮内

侍乃託宣依我是皇太神第一別宮荒祭宮也而依皇太
神宮勅宣今更所託宣也天下四方乃人民皆皇太神宮
乃御寶也云こゝ所見たる是を以て高天原の主宰ふ
てハ渡くせ給へゞも天下國土も皇太神の御かゝる事
を明らめ奉る可く然しバ天照太神素戔嗚尊二柱ふ
て此國土を相保持く御在く坐て其二神の御子を以
て此天下國土を令所知生奉らせ
給ふ事信ふ所謂有る御事ふるむ ○受勅ハ瑞珠盟約
章ふ奉教云こゝ見え又父母已有敬勅云こ天照太神
勅曰云こ又勅曰云こ寶劔出現章ふ素戔嗚尊勅曰云
こ因勅之曰こ有を始こして幾許こ云ふ限も知られ
ざる程の事ふり此等を何れも唯能理多麻布こ訓む
事こ耳思ふハ片屈ふり美許登能理こ云事も何ごり
ハ勿くざるむ勅字を名義抄ふ在る訓の中ふ意冨勢

○第八詔ふ天皇詔旨今勅御事法者常事ふ不有と有る其八詔ふ今来豆良可ふ新役政者不有本由理行來迹事曾止詔と有を受たる者ふて御事法即其行給ふ大御政の詔ふり其外諸
○猶此御事法の事傳二十二卷二百八十五丁ふ云へ

碁登こも有るが如く御命宣ハ仰事の由ふり續紀詔
ふどふ多く現御神止大八嶋國所知天皇大命良麻止詔
大命乎云こ止宣こ有も御命宣こ云事を引延して大
命良麻止詔こハ有ふり常ふ勅宣こ云字を書て言ハ字
登能理こ云けるから音ふ言ひれども其も古ふ美許
れるを其唱へを亡ふひたる者ふり ○受ハ字氣多麻
波理氐こ訓べく公式令ふ右受勅人宣送中務省云こ
こ有て奉勅の字こ通ハし被用たり續紀第一詔ふ授
賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐互
第三詔ふ立賜比敷賜霸流留法乎受被賜坐而行賜事止爲
受被賜而恐美仕奉云こ治可賜止讓賜命乎受被賜坐

而云ニ朕者不堪辞白而受不在間ヲ云ニ第五詔ヲ
大命乎聞食恐美受賜云ニ天皇大命乎頂受賜恐美特
而云ニ恐被賜仕奉者第十三詔ヲ大命乎受賜利恐麻利
云ニ第十四詔ヲ勅丈御命乎畏自物受賜理坐天第二
十五詔ヲ貴岐御命乎頂受給利歓備貴美懼知恐利ヲ云
ニ慶之岐貴岐御詔受賜年卿等麻毋るど有る此等ハ何
れも其大命を受て被賜るを云ふり又物を受て被賜
るをも然云ふ事詔中ヲ多く見ゆ万葉十六三十ヲ東
ノ門由参納来ル命受例婆るども有て受勅ハ御言持
ニ云ヲ近ク二十四ヲ居ル御言乎持而加欲波久十七

記傳ヲ並仁天皇十五年御紀ヲ到葛野目篭興而死之故号其地謂堕国今謂弟国ニ記也と有る引て古ハ訓郡の邊迄係て迄く葛野と云ふ云ふ云と云れたる其葛野ハ始此桂木ヲ依て起れる地名なる可矣子傳ヲ臨楓野ヲ大堰而省造假宮於蜂岡之下と云楓野ヲ

四十ヲ二丁ヲ美許登毋知多知和可禮奈婆るど有る是なり
続紀第一詔國ニ宰等ヲ至麻ヲ有る解ヲ云く宰
ハ守ル縁月るどを惣云ふ此を美許登毋知ニ云ハ命
持ヲて天皇の大命を受賜ハり負持て其國の政を申
す由の名なり云ニ云れたり此ル其如くヲて天照
太神の御命宣を負持して此國土ヲ
降り赴むりせ給へるれば又同ト〇降ハ山城風土
記ヲ月讀尊受天照太神勅降于豊葦原中國到于保食
神許時有一湯津桂樹月讀尊乃倚其樹立之其樹所有
今號桂里ニ見えたれバ其地ヲ初て天降り著給ハり
けむ事傳十四百八十丁ヲ註せるが如ク和名抄ヲ山城國
葛野郡葛野郷有る是なり神名式ヲ山城國葛野郡葛
野坐月讀神社名神大月次新嘗ニ見えたる此地を應神天皇

六年御紀ニ和婆能伽豆怒塢弥例磨と大御歌ニも謡
ハせ給ヘルハ其郡郷名の如く葛野ある事更ニ論ひ
無き物なれ猶風土記の説の如く桂樹の生立りし由
ニ縁て桂里と號けたるが本ニて有しを又葛の多在
りし所なりけむなれ似たる言の二合る故ニ終ニ郡
郷の名共ハ葛野と成しるを其傍ニ又桂里と云名も
遺存り傳ハれるニてで有ぬ可き（凡め名の起れる所由も其似たる事有
る時ハ如此く其説ニ引て傳ハれ（ども）其處ハ別ニ
ふざる例猶各國ニ多在りぬ可し其委しき考共ハ傳
十巻ニ已ニ云ルハ此ニハ漏しつ漢籍ニ謂ゆる月桂
の故事も有れども其ニ此ニ更ニ由無き事共なり思
混ふ可
らずず○到于保食神許ハ攝津国稲倉山なり偖此大

神の産土ハ傳六百十七丁ニ已ニ考註せるが如く決めて
阿波國ニなるも有けれ其ならば後ニ御在しし坐しし處ハ丹
後國丹波郡比沼麻奈爲神社の地なる事下ニ引る攝
津風土記ニ所見たるが如く然るハ後ニ高天原なり
其大神の御靈實を天降し奉ら せ給ヘる其時ハ降臨
次第麗氣記ニ淡路国三上嶽ニ降着せ給ひ其ならば八
輪島宮八國嶽ニ移しせ（給ひ）終ニ丹波國與謝郡比沼山の
頂なる真名井原ニ移御在しし坐る由ニ傳云るハ全く
其現身と御在しし坐て任せ給へる地ニ其御靈も留り
御在しし坐しし ふるも有ける（其書ハ元々集又神祇本源ニ）

神道者の手ふ古く成れる物ふハ有けれども又慥ふ
る御事跡共有て爭ひ難き事ふれが次〻正しき傳を
取れる為る可〻其ハ天孫降臨章第二一書
豊受大神御鎮座の件ふ委〻〻く說徵す可〻其ハ丹後
風土記ふ此沼山頂有井其名曰眞井今既成沼此時天
女八人降來浴水于時有老夫婦其名曰和奈佐老夫和
奈佐老婦此老等至此井而竊取藏天女一人之衣裳即
有衣裳者皆飛上但无衣裳女娘一人即身隱水而獨懷
愧居爰老夫謂天女曰吾无兒請天女娘汝爲兒天女答
曰妾獨留人間何敢不從請許衣裳老夫曰天女娘何存
欺心天女云凡天人之志以信爲本何多疑心不許衣裳
老夫答曰多疑无信穿土之常也故以此心爲不許耳遂

許即相副而往宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飲一盃
吉万病除之其一杯之直財積車送之于時其家豊而土
形富故云土形里此自中間至于今時便云比沼里後老
夫婦等謂天女曰汝兒(非吾)暫借住耳宜早出去於是天女仰
天哭慟俯地哀吟即謂老夫等曰妾非以私心(意)來是老夫
等所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發瞋顏去
天女流涕微退門外謂鄉人曰久沈人間不得還天復無
親故不知由所居吾何也哉吾何也哉拭淚嗟歎仰天歌
曰阿麻能波良布理佐兼美禮婆加須美多智伊弊治麻
土比天由久弊志良受母遂退去而至荒鹽村即謂村人

等云思老夫婦之意我意无異荒鹽者仍云北沼里荒鹽
村又至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹
野郡舩木里奈具村即謂村人等云此處我心奈具志久
古事平善有云奈具志乃留居此村斯所謂竹野郡奈具社豊宇
賀能賣命是也之所見たる事の狀を思ふに此大神阿
波國に生坐つる後に其御父(祖神等又稚産靈神共に已に天上
に昇給へのけむが大神は此頭國に留り御在〻坐〻
間此も天に昇坐むと爲て北沼山頂ある真井に御身
滌ぐことを爲給へりけむ其を老夫婦に右の如く押
止められさせ御在〻坐て終に丹後國に留り住也

給へる事と成ふたるるめり右の天女八人と云ハ其
分身に御在す可〻其和奈佐老夫和奈佐老婦と云ハ
其も其阿波國ありし國神ありけむを其浴水の事を
知て追至り此を窘め奉れり〻者ありと見り(神名式に阿波
國那賀郡和射神社和奈佐意富曾神社有り又和名抄
に同郡和射郷と云有も和奈佐と訓べくして此に由
有り其は勝れて世に御功の高く貴く坐す神の御上
に有る事にて已に素戔嗚大神も彼御荒びに依れ
る事なれども八百万神に祓具を責られ髮鬚又其手
足の爪をも令拔め其罪過を令贖め已に神逐ハれて
天降り給ふにも甚く辛苦く給ふ事ありしかども出

雲國ニ天降り著して後ニ吾心清こゝへと宣ひ擧させ給ふる頃より又比類無き御功坐る大神と成給へり次ニハ古事記ニ所見たる如く其御子大國主神ハ八十神ニ甚く窘められ給ひ偖後ニ其御父大神の御許ニ參到給ふるニ蛇又ハ呉公蜂の室等ニ令寢給ひ竟ニハ御自打殺し給ハむとさへニ爲させ給へり程の事ニて有しも其辛苦を出給へれバ御父大神も於心思愛命寢と有り此云ふこの事ニ依て所造天下大神と其御功高く御在ます如く此保食神も亦然り初ニハ彼老夫婦ニ甚く被窘給ひ又後ニハ此月夜見尊の御爲ニ此ニ事有り此ニ依て食物を保持給ふ御功坐る大神とハ成らせ給へり偖此ハ保食神の決坐し程の御事ニて此時より漸こニ其御德の出來初めさせ給へるなりけり天女善爲釀酒と云を以て知べし若て其老夫婦ニ逐れさせ給へりし所ニ不得置天復無親故と宣へるハ其祖父神土神其親稚産靈神共ニ高天原ニ神留坐ルとも其御許ニも上らせ給ひ難しと云事なるめど文ニ天女と云るゝニ然書成せし者なる可し其天を仰ぎて歌ハせ給へるニも其御祖神の御事を思ひ出させ給ふ御情なむ所見たりける荒鹽村ハ今も有て神名式ニ丹後國丹波郡波

弥神社有る地なり丹後舊事記ニ云物ふ天酒大明神
ニ申すと云り波弥ハ食ふて食物の神と云事なる可
し名木村ハ同郡名木神社是なり同書ふ号天降大明
神と云り竹野郡奈具神社今も奈具村ふ立せ御在し
坐て皆其跡顕然なる事なり偖右の土形里ハ謂ゆる
丹波郡比沼麻奈爲神社の有る地ふて比治と云ハ土
形の略ふて云ひ比沼と云ハ風土記ふ今既成沼と云
ふ其ふ乾たるふ依れる名なる可し細川忠興主の順
國記ふ比治の眞名井原邊ふ磯砂山笛原寺と云ふ寺
有り此後山を比治山又足占山と云ふ豊宇賀能咩命

天降るの山なる故ふ如此云なりと云れき丹後舊事
記ふハ御饌都神天降の地を咩石嵒と云ふ咩岡神社
の地なり比治ハ土形里なり咩石嵒の麓府岡なりと
云るハ其同處なる可し今其比沼麻奈爲神社の立せ
給ハる地を咩村と云と云り其も此比賣神の住せ給
ハるふ依れる地名と知られたり若て右の咩岡神
社ハ式ふ咩岡神社と有れども其地名なるふ然云ふ
上ハ土人の唱ふる方正しなる可し右等を以て此大
神の中間住せ御在し坐し地ハ其邊なりつる事を次
ふ引る攝津風土記ふ依て思合て可くなるむ有ける其御

祖神等の已く上天ニ升坐しと云ハ殊更めきたる說ニハ有れども已ニ傳十二卷　十丁ニ云るが如く火產靈神の御靈の上ニ在せるが丹塗矢ニ化て御子を令生給ひ其御子ニ汝の父をと云ハバ覺を穿ちて上ニ升れるなどを以て知る可く又稚產靈神の天ニ坐す事ハ明文拔ニ載たる大倭本記ニ天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也云ニ一鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向宮師社宮所坐拜祭大神也と有を古史徵ニも釋紀より引れて一鏡ハ登由宇氣神の御靈實ニ坐しと子鈴一合ハ神名式ニ大和國城上郡卷向坐若御魂神社と有る神の御靈實ニなるむ坐こけるなど云れたるが如し此神等若此國土ニ御在しと坐す神なるもの能ニ天上より御靈實を定めて天降しと給ふハ及バざる事なり此ハ其現御身ハしる天上ニ御在しと坐が故ニ依る事佗の例共を見合せても曉る可し此を以て此說を成せるなり　故其保食神の本處を右の如く丹後國と定め置て其を徵し明らむる文ハ攝津風土記ニ稻倉山者止與哿可乃賣神居山中以盛飯因以爲名又曰昔豐宇可乃賣神常居稻椋山而爲膳厨之處後有事不可得已遂遷於丹波國比遲乃麻奈韮地名と有る是なり上三十四丁ニ引る山城風土記ニ葛野郡桂里ニ月夜見尊の天降給ハるハ其より乙訓郡を隔てゝ攝津國なれバ其使理ニ困しゝ也給ハるなり偖盛飯と云て其を稻倉山の故由と爲るハ稻倉ニ積畜ハひて天下の蒼生ニ食物を授與給ひしなり爲膳厨之處と云ハ御厨と爲さ也御在しゝ坐しるなり偖稻倉ハ稻積と云ニ同じ其ハ出雲風土記島根郡條ニ伊奈頭美社有る其を風土記

抜ゐ伊奈久良大明神と称すと云ひ又稲上濱云ふこと
有る次ゐ稲積嶋云ふこと有て右の稲倉大明神鎮座の
地なりと云を思合すに可く又神門郡稲積山の下ゐ大
神之稲積也と見え稲山の下ゐ大神之御稲と有ハ共
ゐ稲倉の事なり又太秦牛祭に文ゐ田中仁渡安良祢土
稲積と云るゐどハ稲を藏むる倉なる事愈著明き者
なり又神名式ゐ讃岐國苅田郡高屋神社今豊田郡高
屋村ゐ在て稲積大明神と申て所祭保食神なりと
云ひ式外なれども播磨國明石郡大倉谷村ゐ稲荷大
明神と云ふ舊社有も右と同くなる可く高屋と云ひ

△播磨風土記ゐ揖保郡稲種山大汝ゐ日子根命二柱神在於神前郡堅里生野之岑望見此山云彼山者富置稲種即遣稲種積於此山山形似稲積故曰稲積山と有ゐて愈以て明らかなる者なり

大倉と云る共ゐ稲倉ゐ由有り然れば稲積と云ハ稲
を積充るを以云ひ稲倉と云ハ稲を藏るを以云称ゐ
て共ゐ同じき事を先心得べし△大同類聚方ゐ星加北藥山城國葛野郡稲積
社の宮造の家方云こと有り式ゐ載らずと雖も然
る社の有ける故可しく右の稲倉山の故事なるべゐ依
れるゐハ若くハ葛野坐月讀神社の別社なるゐや
和名抄郷名ゐ大隅国桑村郡薩摩國河邊郡ゐ稲積と
云も見ゆ右の稲倉山の所在今詳らかず今云試らて後勘
を待つ者五有り一ゐハ廣瀬社縁起ゐ役優婆塞十九
歳而入箕面瀧又入水足池忽到龍宮城云こ其中央在
女體之尊形云こと云ハ例の取ゐも足ざる事なれど
も其水足池ハ若宇加賣命の坐す廣瀬社地ゐ在を其

小並べ云ふハ古く其神の坐し稲倉山の地なるを以て云掠めたるらと思ゆれば有り若て其箕面山ハ嶋上郡に在り二ハ神名式に河邊郡賣布神社有り今栄谷村に在て貴布祢と云由なるハ稲倉山より闇龍神と轉り其より貴布祢と再轉れるもの也栄谷村と云も由有げるり三ハ菟原郡保久良神社欽敕有り上三十五丁に引る麗氣記に豊受大神の御靈實の天降りて鎮坐す中に淡路國布倉宮に坐と云るを三原郡に福浦と云地有り又出羽國飽海郡大物忌神社名神大社に説が如く倉稲魂命に坐るに其地を福浦と云るるとも合れば保久良ハ穂倉にて稲倉と云に同じりる可くや有む四ハ和名抄郡名に嶋下郡穂積保都美有り穂積ハ稲積に同じく稲積ハ稲倉に等しき事右に云る事共を思合す可し五ハ東生郡に豊津稲生社と云有り其傳に往古下照媛命倉稲魂命を上社とし其後二社を造營して稚日女尊月夜見尊を中社とし香具都智命を下社として三社を齋奉ると云て山城國稲荷神社なども大に異なる者なり且出雲風土記に意宇郡飯梨郷云に大國魂命天降坐時常此處而御膳食給故云飯成と有が如く稲生と飯成と其

△後ニ物部守屋大連公の裔稲生氏の家記を見るに曰く稲生
を収めたり正一位稲生大明神三社神代の昔より御鎮座崇神
天皇御宇御宮造御神体種々御寶物納有数延喜式拾遺ニ為
伊勢國奄藝郡稲生神社大神宮の西北を去る事九十四里
栗眞庄稲生村神路因ニ在り並て三社分て東西二所ニ鎮座
社頭南表本社大宮奈神那江大國道神保食神衣朝五穀ニ
衣服の元神と奉崇即御倉津神なり雄略天皇御宇神徳を
尊き那江大國道命と尊号を降し給ふ東別宮三大神奈
神鳴雷電光神大山祇神龍神西別宮祭神豐受賀賣命
稚産霊神右を稲生三社と奉崇る又豊御寄社祭神猿田
彦命稲生社神佐神なり東國因社祭神保食神稲生社
降給ふ時御鎮座の地なり都合稲生五社と称す
八千四百当社三年ニ一度丑辰未戌年ニ当り三月朔日より三
日まで大祭礼有り往古ハ京より勅使被遣使参向の由
旧記ニ見ゆと有り右の那江大國道神と申ハ那江ニ若く
昔ハ那閇なるを閉を俗に延の如く唱ふる事
なる可し大國道ハ大國主神の稲魂
る謂なる可し實ニ神代よりの舊社と聞えて甚止事無
き御社となむ通えたる

膳尓之處なりとくいふにし
朝野群載ニ生島高神之
て在しかが其稲倉山ニ
然れとも何れか其と今
の如く説を立置て後人
訓栞ニ伊勢奄藝郡ニ稲
村有り式ニ伊奈冨神社
りニ記せり保食神を祭
の古額を蔵むといふと云
伊奈冨とも云其唱ハ異な
せるなり其四至の事ハ
摂政右大臣家政所下文
東白子濱限南井手橋南
雜事記ニ三月三日奄藝
永万記ニも稲生社と作り

故其稲倉ハ稲積ニて稲を刈藏る倉庫を云なるニ就
て猶考るニ皇太神宮儀式帳ニ竹首吉比古五百枝刺
竹田乃國止白玉 櫛田根椋倉神御田進之 有を等由氣宮
儀式帳ニ根倉物忌父と見え其職掌ニ根倉社二所神
殿造 掃清奉 理 五年別仕奉と有り其社ハ神名式ニ多
氣郡根倉神社有る是なり故根倉の根ハ伊祢の伊を
略けるニて稲倉と等しかる可し倭姫命世記ニ調御
倉神を保食神是也と云るを以て其根倉社の祭神を
も察ふ可く又稲倉山の事ニ近も及ばして考合す可
き者ニなむ有ける 但右の根倉神社を諸本共ニ櫃倉
ニ作るハ櫃の草体根字ニ似たる

亀山天皇文永十一年甲戌ニ納奉らせ給へる

言近きを彼盛飯と云ひ又爲膳炊之處ちどと云ふも
思合せらるしばあり此地ハ朝野群載ニ生島高神之
地と云る傍ふて往古ハ山ふて在しかば其稲倉山ふ
どふもやと思合せ侍ると云る然れども何れも其と今
慥ふ定む可き證無が故ふ右の如く說を立置て後人
の定めを待つ者なりと（和訓栞ニ伊勢奄藝郡ニ稲生村有り式ニ伊奈冨神社詳らふ記せり保食神を祭る）
と見え朝野群載ニ四至を詳らふ記せり保食神を祭
ると云り正一位稲生大明神の古額を藏むと云と云
り稲生を伊那利と訓むと伊奈冨と云と其唱ひ異ふ
しども同神なる任ふ此ニ出せるなり其四至の事ハ
群載七卷ニ嘉祥二年十二月根政右大臣家政所下文
稲生社四至限西国府東坂川限東白子濱限南井手橋南
畔限北奄藝川曲郡堺と有り雜事記ニ三月三日奄藝
郡坐稲生社祭日也と見え永万記ニも稲生社と作り

故其稲倉ハ稲積ふて稲を刈藏る倉庫を云なるふ就
て猶考るふ皇太神宮儀式帳ニ竹首吉比古五百枝刺
竹田ヲ國止白豆櫛田根倉（椋）神御田進と有を等由氣宮
儀式帳ニ根倉物忌父と見え其職掌ニ根倉社二所神
殿造理掃清奉豆年別仕奉と有り其社ハ神名式ニ多
氣郡根倉神社有る是なり故根倉の根ハ伊祢の伊を
略けるふて稲倉と等しかるに可し倭姫命世記ニ調御
倉神を保食神是也と云るを以て其根倉社の祭神を
も察ふ可く又稲倉山の事ニ近も及ばして考合す可
き者ふなむ有ける但右の根倉神社を諸本共ニ穫倉
ニ作るハ穫の草体根字ニ似たる

〈万葉十六に荒城田乃子師田乃稲子倉を舉藏而〉

〈天武天皇四年御記に祭大忌神於廣瀬川曲と有と後さして次に皆然り〉

らく誤れるなり延經神主の考證又谷川士清説に也
櫃ハ根ゝて根倉なるを可き由云て誤なる事勿然けれ
バ今改め引るなり〇月夜見尊と稲倉山との事に就て猶奇異
なる説をも得たりける神名式に出羽國飽海郡大
物忌神社名神大と二座並坐て今も鳥海
山麓吹浦と云所に立せ御在て坐す其大物忌神ハ大
和國廣瀬郡廣瀬坐和加宇加曹命神社名神大月次新嘗を四
時祭式に大忌祭と有も大忌神祭と云に同じけれバ
大忌神と大物忌神とハ決く同じ神に渡らせ給ふ事
申すも更なり（其大物忌神社の祭神）一宮記に倉稲魂神と有を廣瀬社縁起
に此御紀を引て又飢時生兒日倉稲魂命此大忌廣瀬
社也と云に合れば疑ふ所無く此保食神に御在て坐
す御事なり月山神社の御事を此に云ていハ入乱れて
混るいしきゞ故に其ハ此次に委く明
らめ奉る可きを又止む事を得ずしていハ
此ハも彼ハも打混りして云事も有む　大瀧光憲云
其大物忌神の鎮坐ます鳥海山に稲倉嶽と云ふ古よ
り以來人跡の未汚さざる峻峯（サカシキミネ）有り岩木に異なるゝざ
る山伏と雖も犯して登得ざるハ其神靈の甚神にして
く御在て坐が爲なる可し又訛りて稲村嶽とも云り（云傳に鍋森と云も有）
其摠てを鳥海山と云も古き事にていハ有れども若く
バ鳥（テウ）ハ鳥（カラス）を誤れるにて遠賀山とこそハ云けめ和漢
三才圖會に由利郡象潟神社祭神豊園姫命と記せる

をも思合す可し又其山頂に數千の巖有り其中に蝗
穴と云が有て夏だに雪は消せぬ所あるに蝗の多く
集り居り詣る人毎に其穴口に紙を押て歸るに其禁
厭と成て其人の持る田に蝗の害無き由にて六月
七月の間は近國より競ひ登る山なり又奇しき事は
其穴共に蝗の多く聚がる年は里に吹く里に蝗の害
多き年は穴に吹きるど古より違はず古語拾遺に御
歳神發怒以蝗放其田と云事も有るれば其害ふと損
はざるとは神の御心に依る事なれば然る蝗共を自
由なるべ今ごとて其巖穴の中に含給ひける者なめり

然るにても里にては冷氣に逢へば忽ちに虫の
山にては然計の深雪の中に生存ふるるも異しきる
事なりける稲倉嶽の名と云ひ月山神社と云ひ又斯
る神異の事と云ひ實に奇しく妙なるは其摂津國の
稲倉山の事に就て由有げなる事共なり」と云遣せた
るに就て予思へ〳〵は其風土記に有事不得已遂還
於丹波國比遅乃麻奈草と有れば唯に還しに也給ふに
は非ずして處に逐れ給へる程此に來坐て稲倉嶽
に住也御在しを坐しを又月夜見尊も追至しに也給へる
るけもを右の如くが月夜見尊は保食神の爲に

御敵ふてハ有しかとも後ふハ殊ふ親しく奉る也給
ふ由なりけれバ其時なるとも や月山神ふ鎮坐つゝも
此ふ一思合す可き事ハ陸奥國津軽ふ磐城山と云有
り俗ふ津軽冨士と云是なり其山の神如何なる由ふ
り丹後國の人共其國ふ入來り又其津ふ舩と羅も泊
る時ハ必大ふ風雨を起して荒るゝ事なり斯る時ふ
ハ領主より探索て其境を出し遣るふ本の如く日和
ふ成る事信ふ争ふ可らずと云り如何ふ
る神ふて如何なる由とも知るべからざれども丹後人と
なふ云ハバ忌と云も此の故事ふ思依る事無きにし
も非れが今驚かし置續後紀ふ兼和五年五月丁卯奉
なり後人能考ふ可し
授出羽國從五位上勲五等大物忌神正五位下餘如故
同七年七月甲戌朔己亥奉授出羽國飽海郡正五位下
勲五等大物忌神從四位下餘如故兼充神封二戸詔曰

天皇我詔旨ふ坐大物忌大神ふ申賜波久頃皇朝ふ縁有
物怪天ト詢ふ大神爲崇賜信倍加以利遣唐使第二舩人等廻來
申久公年八月ふ南賊境ふ漂落氏相戰時彼衆我寡氏
力甚不敵奈利儻而克敵留波似有神助止申今依此事臆量
ふ公年出羽國言上太留大神の於雲裏十日間作戰聲後
ふ兵石零利申世利之月日與南海戰間正是符契世利大神
の威稜令遠被大留事子驚異且奉歡喜故以從四位爵子奉授
両戸之封奉克充良久子申賜波久止申と見えたり其兵石と
云ハ下ふ謂ゆる石鏃又石鏃の事なるなり神異の事ハ此を始
として下ふ擧るが如し此ハ保食神と同神なる倉稲
魂神ふ御左し坐せバ斯る兵事を助さ世給ハるふ似

者ハしりぞける事ふれども恐て斯る大神ハ其役
奉る神等も多く坐す者なれバ其神をして令助給へ
る者ふぞ有ぬ可き三代實録ハ貞觀四年十一月乙丑朔以出羽
國正四位下勲五等大物忌神預之官社同六年二月五
日授出羽國正四位下勲五等大物忌神正四位上同年
十一月五日授出羽國正四位上勲五等大物忌神從三
位同十三年五月十六日辛酉先是出羽國司言後三位
勲五等大物忌神社在飽海郡山上巖石壁立人跡稀到
夏冬載雪禿無草木四月八日山上有火燒土石又有聲
如雷自山所出之河泥水溢其色青黑臭氣充滿人不堪
聞死魚多浮擁塞不流有両大蛇長十許丈相流出入于
海只小蛇隨者不知其數緣流損者多或染濁水臭氣就
不止聞古老未嘗有如此之異但弘仁年中見火其後不
幾有事兵伎決之著亀並曰彼國名神因所祈禱又冢
墓髏骨汚其山水由是發怒燒山致此災異若不鎮謝可
有兵役是日下知國宰審宿禱去舊髏汗と有り其弘仁の度か
るハ如何ありしハ正史ハ載くれずと雖も同じ狀の
事ありしるる可し大龍光憲云文化元子年ハわ有け
む右の鳥海山時ニ燒けて晝ハ白く烟立弁り夜ハ赤
く火焔ふて見えけるが其山水の流るゝ限りハ魚大
ハと無く悉く死亡てけれが人皆異しく思ひて有け
る程其六月六日の夜大なる地震有て古より然しも
名高りける象潟も唯一夜の間ハ陸地と成竟たり
ミ云り此等も神の御上ハて所由有る事なるもを
著亀ハ決めざるが故ハ其事ハ緣れるある可し
の知るれぬこそ悔るしけれ

同十五年四月五日授出羽國從三位勲五等大物忌神
正三位と有り又元慶二年八月四日丁卯（出羽國）正三位勲五
等大物忌神進勲三等（正三位勲六等月山神罪等從五位勲九等大物忌神七等）云ふ先是右中辯兼權守藤原朝
臣保利奏言此三神自上古時方有征戰標奇驗去五月
賊徒襲來挑戰當此之時雲霞晦合對坐不相見營中擾
亂官軍敗績求之蓍龜神氣歸賊我祈無感增其爵級必
有靈應國宰齋戒祈請慇懃望請加進位階將答神望仍
增其等級云と同四年二月廿七日（出羽国）正三位勲三等大物
忌神授從二位と見え本朝世記に天慶二年四月十九
日庚寅云ふ官符三通皆給出羽國云ふ鎮守正二位勲

三等大物忌明神山燃有御占と有て神階も甚高く進
ませ御在く坐ハ然る度ごの奇驗に因れる為る可し
其に物忌神ハ元慶四年二月廿七日授從五位下勲七
等（表）物忌神從五位上と有り傳十卷三十丁に云るが
如く飛島と云に今大社と申す社有る是なりと云り
土俗の傳に飛島の一名別島とも云て島海山より別
れ飛たる謂なりと云り大瀧光憲云ふ島海山より裂け
れ土人の相傳ふる所必然る可し然もやと所思しき
事ハ今現に其山を見るに西方ハ半より頂上に至る
迄削たるが如くして其東南北の如くに山形足ハず
又其山の南北共に巖石一も無く西麓なる御崎山と
云り上方ハ洽心（恰）河原などの狀して大なる巖共幾
万億と云數を知ず海も亦然り浪際ハ荒磯にて飛島
に至る迄同じく唯一條の如くなり且飛島に在ゆる
巖石草木共に皆其鳥海山の物産と全く同種なるハ
土人の傳ふる所信に諾（ウベ）に足れりと云り予も時に
其御崎山に至て其形勢に見るに然もやと所思る任

ふ又光憲が言を諸ひ記す者るゝ又三代實錄ふ仁和元年十一月廿一日辛丑去六月廿一日出羽國秋田城中及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃陰陽寮ふ曰當有山狄隱謀兵乱之事神祇官伯言彼國飽海郡大物忌神月山神田川郡由豆佐乃賣神俱成此恠宗在不敬勅令國宰祀諸神兼慎警と見え又同二年二月出羽國飽海郡諸神社邊雨石鏃と有り上るゝ兼和の度ふ兵石と云ふハ其類るゝ可し今し其土人ハ各二月九日山ふ入る事を大ふ禁む若此を犯して入る時ハ必石鏃來りて其身ふ當る事し有と云て慎しむ事とるむ云めるハ如何るゝ所由とし知べゝふざれどし現ふ今し然るハ甚止事無き神事の必御在ゝ坐するふ可しゝ又大凡ハ其石鏃の降る所定り有て必大るゝ風雨の後るど必散ぶひ在と云ハ右の如き兵事の徵るど耳ふし非ず土人の云る神軍ふ用給ハりしゝが此事畢りて落來るふてぞ有べゝりける其國ふ傳へて右の石鏃を神矢根と云めり右の神矢根許高しき物ハ世ふ非ふ其質ハ水晶の如くして白く或ハ赤く黑く紫るゝし有り青るゝし有り又ハ馬腦石るどの如く或ハ鈍色るゝど種ふて其麗しき事云む方無ゝ其質ハ何とし皇國ふてし外夷ふて也譬ふ可き物無ゝ其矢先の爰利る事嚴とし通ゝつ可ゝ其製樣何れし一種るゝず鏑矢有り鳴股有り或ハ矛鋒の如く又ハ劔鋒の如く皆凡るどを以て前成せる狀ふて神るゝずしてハ必成し得まじき者か

り去し辛酉年秋田へ行こて大物忌神社月山神社ハ
詣たるハ神主鈴木重宜と云ハ社頭ハ來りて予ハ得
させたるハ其水晶質のハて青白二種ありき 主税寮
直ちハ神寶と爲て今も持齋きて有る事あり
式ハ出羽國月山大物忌神祭料稲二千束と有るとも
餘社ハ超たる御會釋ある者あり又右ハ飽海郡神宮
寺と云も其両社の爲ハ被置たりと聞えて此ハ甚ク
汚く穢ハしき事ハて有しとも其頃然る事こハ所
思し著せ給ハざる程なりしかバ却ハ神宮寺の有そ
貴き御社ある證とハも成ぬ可き事なりけり此御社を
貞觀十三年の文ハ在飽海郡山上と云るハ今も山上
ハ立せ御坐し坐て夏頃人の詣る所なる可し然れど

も社家記ハ大同元年奉遷吹浦村と云れバ其山上
と云ハ神の所在ハて稲倉嶽の事なる可けれバ其ハ
社と云ハ神境の事なる可し右の大物忌神社月山神
社相並び給ハるを以て今一宮両所權現と申せるか
り北地を吹浦村とも福浦とも云り此事已ハ三十五
てハ云り兵家茶話と云物ハ載たる古文書ハ一
宮両所大菩薩と云るも著く右の福浦と云ハ神宮
寺てふを始さして僧房三十六さり在りと云り如何
ハ忌ハしき事なるずや ○式ハ月山神社名神大 有て右の大物忌神
社ハ並べるハ北の故事ハ依れる事右ハ云るが如く
なるが月山と云山ハ古の出羽郡今の櫛引郡ハ在れ
バ飽海郡ハ其神社の有バりしくも思えぬ事なれど

と右に引るが如く御紀に並載られたれば神八月山に坐を神社ハ飽海郡にて古より祭來れる者ありけ玉吟集に家隆卿過て行く磯邊の夢路跡も無し心り標し月の山本夫木集に加賀月山曇らぬ影ハ何時と無く麓里に住む人ぞ知る大進久方の月の山邊に家居して入時も無き影を見る哉と有り枕草帝に月の驛と云ハ此國なるを知らず三代實録に貞觀六年二月五日授出羽國正四位上勲六等月山神從三位同十八年八月二日授出羽國從三位勲六等月山神正三位元慶二年八月四日丁卯出羽國正三位勲六等月山神進勲四等云ニ此時の事ハ大物忌神條に就て見べし（同）元慶四年二月廿七日出羽國正三位勲四等月山神授從二位仁和

元年十一月廿一日辛丑去六月廿一日出羽國云ニ雨石鏃云ニ神祇官言彼國飽海郡大物忌神月山神云ニ俱成此怪（恠）祟在不敬勅令國司奉祀諸神兼慎警之有り主税寮式に月山大物忌（神）祭料稲二千束と有て惣て大物忌神と同等に會釋い奉る也給ふ御事にて其御社々の重く御在す坐す御事知べし此ハ傳十（四百九十丁）度會宮四所別宮の第一に月夜見宮御在す坐す等に始ハ此保食神に仇るひ給へりしかども後に高天原に神逐ハれさせ給へる（其後）程より豊受大神の御德を顕ハし奉らせ給ふ御事耳を勉め物為させ

給ハるが故ニ殊ニ親しく御中間とハ成給ハる者ニ
りけり　上ニ引る天地麗氣記ニ豊受大神の天降りて
鎮坐し八國嶽と云ハ今栗村山發帝院常隆寺
と云ニ當りて其奥院と云ニ伊勢宮と申して甚可畏
き所ニ祠有り其るゝもと所思ゆ何故ニ此を八國
嶽と云ぞとるしバ云傳ハて山城大和河内和泉摂津
紀伊播磨備前の八國を眼下の如く望む所るれバる
り其山の峯傳しニ一里許東方ニ月山と云有り傳云
出羽國より月山と云ふ鍛冶來りて其麓ニ住ける故
ニ吹革口るど云地名有り其工が本国の月山より負
来るる觀音と云者を今祀れるが例の本地と云心ニ
てるる可けれども月山神ニぞ御在すゝむ斯る神代
の故事も有ればバ月山の名ハ既く有けむを刀工を其
本國の名と等しきを縁として來り住けるニ和山名
ハ甚古くより然云りけむと所思しけれバるり然れ
ども此ハ其因ニ依て云耳○許ハ身所ニて身の住て居る所の謂る
るるり寶叡出現章第三一書ニ今在吉備神部許也と

五共在素戔嗚尊許と書され其洗ハ訓を分て

見え天孫降臨章第二一書ニハ汝二神非是吾處來者
海宮遊行章第四一書ニ今者天神之孫辱臨吾處第七
一書ニ故當産時必就君處第八一處ニ至君處至妾處
とも有て許を登許呂と處を毋登とも相通ハし用
ひたるを考合す可し万葉十三　二十三丁ニも余所留跡序
云るども有り名義抄ニ許字を毋登とも登許呂とも
云る是るり　又許を賀理と云事有り其ハ我許又ハ君
許るを云類ニて万葉八ニ妹許登吾云道
乃九ニ妹許將遣黄葉手折奈十ニ妹許行名夜者雖深
と有る此等ハ十四ニ伊毋我理登倍婆氣ニ餘婆受吉
奴と有ニ訓を得て許を賀理と訓べき所るり十一ニ
吾皆子之吾許不來者外宮儀式帳ニ我御饌都神等由
氣大神宇我許欲止誨覽綿奉支とも有る此ハ許字を
波加理と訓る其上略ニて其身許ニ事を却て云るニ

て其意甚く狭き者なるべし○脊ハ加牟倍と訓べし第六一書なる千頭千五百頭などの頭字ハ正しく加志良と訓べき所なり傳十二百丁二ハ云る如くなれども本ハハ加字倍と訓り和名抄ハ首頭釋名曰首和名加始也頭訓上字倍同一云賀之良獨也言處體而獨貴也と有り頭の事ハ已ハ傳九四十八丁ハ云り偖加字倍ハ音便なるを本ハ復して加牟倍と云ハ上方カムベの義ハて一處を指ずして大凡ハ云称ハて下方を須曾と云ハ末外スエソトの意なる對なる可し又唯ハ裾スソの方を下シモと耳も云るが如し第六一書ハ劔の頭ハ古事記ハ千上と有ハ其訓の同じきも頭字ハ上なる意有れば然なり又諸蔡ハ長官を頭と云し亦此ハ同じ偖此首字此の第一一書ハ美具志と訓第八一書ハ加志良と訓ミ此ハてハ加牟倍と言を換て訓を成せるハ古人の深く心を被用たるなり改も可らず○國ハ此ハ下なる海字を字那婆羅と訓れば其ハ並べて久迩婆羅と訓つ可き處なり万葉一七丁ハ國原波煙立籠海原波加萬目立多都と並べ詠給ひ又十二丁ハ立見ハ來史伊祭美國波良と も詠せ給へり偖此を然訓むを如何と思ふ人も有るめども唯國と耳訓てハ言の足ハざるが如き所なれば必原字を加へて訓ずハ有べからず然るハ國と訓てハ其保食神の坐す所本なる國土なるけれバ治り難ふ事と國原と訓む時ハ國土の中の平なる地ハ物爲給ふ事と聞ゆれば○脊ハ牟加比給比志加婆と訓べし傳十

此細書此丁ノ裏ニアルベシ

名義我抄ハ脊ノ字を與向通用と有て牟加布ハ也と林登之也淤毋牟久之也云訓有り

前同斷

大同類聚方訓波比阿奈都久也ハ の中ハ回致と有り和名抄ハ所以言食也と有り然れば食を以て ハ右の如く唯道なる可く言を以て ハ氣道の義なる可

て其意甚く狭き者なるべし○脊ハ加牟倍と訓べし第六一書なる千頭千五百頭などの頭字ハ正しく加志良と訓べき所なる傳十二百丁二ハ云る如くなれども本ハ加百三丁

字倍と訓り和名抄ハ首頭釋名曰首和名加始也頭訓上字倍

同一云賀之良獨也言處體而獨貴也と有り頭の事ハ已ハ傳九四十八丁ハ云り偖加字倍ハ音便なるを本ハ復して加牟倍と云ハ上方の義ハ或ハて一處を指ずして大凡ハ云称ハて下方を須曾と云ハ末外の意なる對なる可し又唯ハ裾の方を下と耳も云るが如し第六一書ハ斂多頭の頭字ハ古事記ハ千上と有ハ其訓の同じきも頭字ハ上なる意有れば也又諸寮ハ長官を頭と云も亦此ハ同じ偖此

首字此の第一一書ハ美具志と訓第八一書ハ加志良と訓ミ此ハ加牟倍と言を換て訓を成せるハ古人の深く心を被用たるなり改も可らず○國ハ此ハ下なる海字を字那婆羅と訓れば其ハ並べて久延婆羅と訓つ可き處なり万葉一七丁ハ山國原波煙立籠海原波加萬目立多都と並べ詠給ひ又十二丁ハ立見ハ來史伊祭美國波良と詠せ給へり偖此を然訓むを如何と思ふも人も有るめども唯國と耳訓てハ言の足ハざるが如き所なれば必原字を加へて訓ずハ有べからず然るハ國と訓てハ其保食神の坐す所本なる國土なりけれバ治り難ふ國原と訓む時ハ國土の中の平なる地ハ物爲給ふ事と聞ゆ○脊ハ牟加比給比志加婆と訓べく傳十

名美我抄ハ脊ノ字を與向通用と有て牟加乃比と麻久之と訓淤母牟久之も云訓有り

大同類聚方訓波仁阿奈都久もろの中ハ固致と有り和名抄ハ所以言食也と有り然れば食を以て右の如く唯道なる可く言を以てハ彩道の義なる可

百八十九丁 向字の下ニ註〻又十二丁 迎字の所ニも云り○口ハ咋道ニて食物の入通ル路なる由なり神武天皇御紀大御歌ニ人〻者茂等珥于恵志破餌介涕句致衍致弭比倶と有も薑を喰へバ其咋道なるロの疼らぐ由なり 或説ニ凡物之生皆有口而出口腐也謂腐ぶる事なり豈熟食物也と有れども腐すハ物の腐れ亡其謂なるもや○飯ハ氣實の意なり武烈天皇御紀ニ掩摩該依播伊比住倍毋理推古天皇二十一年御紀ニ伊比ニ慧王許夜勢屢なれど正〻く伊比と假字ニて書ルたる事なれども其本ハ氣實なりと云ハ氣ハ食物の精ニて人の性命を保つ所以の者なる事已ニ傳十六ニ云る事共を思合す可〻實とハ祝詞式ニ多く酒と飯との事を汁毋類毋粉辞竟奉年云こと云るを中臣壽詞ニハ汁毛實毛云こと云換たり此を以て類と實とハ一なる事を知べきなり又美を比と云例ハ御貢を比都岐と云ふ即天津日嗣なれど是なり古事記なる御力之手上を瑞珠盟約章ニ劔柄と書て多加比と訓るなど其例なり是を以て伊比ハ伊美の義なりとハ云なり 淮南子註ニ精者人之氣也と云ひ莊子刻意註ニ精者物之眞也と見え字典ニ増韻を引て凡物之純至者皆曰精と有る精字ハ米ニ从ひ青ニ从ひて其米ハ穀なり青ハ生なり人精ハ穀氣ニ生ル義なり其氣ハ又餼ニて食氣を云なり若物を食ハざる事日を累ぬれバ穀氣盡て其人必命死なり

（万葉十六に行ふ飯盛而門に出立雖待不来座と有も古ふ客を待ふ飯を盛設る習俗多ふを知べし）

此を以て飯ハ氣の本たる事を知べきなり上ふ引る風土記ふ居山中盛飯と有ハ常ふ笥ふ飯を盛て天下の蒼生を常ふ養給ふを以て御徳と成〳〵御在〳〵坐けるなり（此ふ就て思ふふ神功皇后十三年御紀ふ笥飯大神と申す御名有り其を古事記ふも故ふ称其御名號御食津大神故於今謂氣比大神也と有て此ハ謂ゆる神名式ふ越前國敦賀郡氣比神社七座並名神大と有る御社の御事なるを社説ふ上古より鎮坐すハ保食神なりと云り然れバ笥飯の意の御名ふて右の盛飯と云ふ御功ふ依れる神名なる事申すも更ふなり上なる武烈天皇御紀歌の地

麼該ハ釋ふ玉笥也と有り又万葉二（二十二丁）ふ家有者笥ふ盛飯乎と見え延喜式ふ飯笥と有る是なり（名義抄ふ笥を祁と有り祁ハ飯を受入る器の名なる事此等を以知べし）説文ふ笥飯食之器と有り又飯を笥ふ盛る間其を（ヒ）ふ器を伊勢物語ふ伊比賀比と云り飯匙と書ふ俗ふ杓子と云是なり今此ふ云ハ阿波國ふ大宜津比賣神の ふ祠有て其神像を ふ泉康敬が寫せるを見たるふ左袒なる女体の右手ふ飯匙を持せるなり右の盛飯と云事ふ思合せらるゝ故ふ今云なり其笥飯大神と申す事ハ淡路國ふ起りたる事なるゝ其ハ已（三十五丁）ふ引る麗氣記ふ豊受大神の天降りせ給ふ所を云る三上嶽ハ今（津名郡ふ）先山と云て觀音と云る鬼を祀る所とハ成しゝ共も先字ハ饌（セン）山と云を書誤ハたるふて二荒山（フタラヤマ）を日光山（ニッコウザン）と云類ふ

る可し〜麓ニ上内膳村下内膳村と云有も饌山の縁ニて本ハ加志波傳と云けむ事灼然し〜次ハ輪島宮と云（ニ布久良宮と云ハ福浦村次ニ）ハ三原郡八幡村なる可し福浦村とハ陰陽なる地ニり八國嶽の事ハ右（五十丁）ニ云り然るニ同郡ニ飯山寺村と云有も思合す可く慶野村有も考合す可し其ハ万葉三（十六丁）ニ飼飯海乃庭好有之苅薦乃乱出所見海人釣舟ナ（四十丁）ニ飼飯海浦ニ依流白浪敷布二妹之容儀者所念香毛など見え次ニ時風吹飯乃濱ニ云ニと有も飼飯ニ吹飯を云係たるニて布留山を袖振山と云係たるニ同じ和泉國（日根郡）ニ吹飯浦と云も有れども

（摂有ハ摂津國西成郡たるべし）

其なるぬ事次なる柔田津ニ云ふの歌ハ讃岐國なるを以暁る可し〜然れば此飼飯海ハ右の慶野村なる事灼然き者なり今も慶野の松原と云て本國（其ハ）ハ名高き佳境なれも（予ガ本國ニてハ有れども十里餘も隔れしかば未行見ず此ハ幼く人の云を聞保てるを云なり千蔭ガ略解ニ右の飼飯海の事を説て飼飯ハ越前なり此地名此ニ出べくも思えず云〜と云るハ鹿漏なる事共なり其（此歌）ハ柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首と云中ニ在て其一ニ三津埼浪矣恐云云ニ珠藻苅敏馬乎過夏草之野島之埼ニ舟近者奴と有ハ神名式ニ摂津國八部郡汝賣神社有り三ニ栗路之野島之前之云〜ハ淡路國津名郡藜浦村と云ニ今も野島と云て有り四ニ荒拷藤江之浦ニ云ニハ和名抄ニ播磨國明石郡葛江郷布知衣と見えて右の野島と相向ハる地なり五ニ稲日野毛去過勝ニ思有者心戀敷可古能島所見ハ（同和名抄郡名ニ播磨國賀古郡）印南伊奈美見ゆ六ニ留火之明大門ニ云〜七ニ自明

門倭島所見之有ハ播磨之淡路之間ある大所を云
ルバ總て小係れり其ハ此飼飯海云くの歌ホて其
道次甚能合ひ十二卷ある悲別歌三十一首の中ある
ども其ホも次第有て其前後を考合するホ其一ホ春
日野之淺茅之原ホ云る其二ホ住吉乃崖ホ向有淡路
島云と其三ホ明日從者將行乃河之出会者云と此ハ
右ホ云る稲日野の事ある其四ハ海之底奥者恐磯回
從云こと有て地名を云ず唯舩路の歌ある其五ハ右
の飼飯乃浦ホ云こ其六ハ時風吹飯乃濱ホ云この歌
ホて其六ハ桑田津ホ冊集將爲跡云くの歌ホて其ハ
上ホ云る如く讃岐国ある又其道次の違いざれば
右の飼飯海ハ越前國ホて非ずを明らむ可き者ある
り次ホハ播磨國ある稲日野ホ御在したる可し上四十
丁ホ云る如く明石郡大倉谷村ホ稲爪大明神の社立
せ御在し坐る由有り古事記の稲氷命を神皇系運章
ホハ稲飯命と作れたり然れば稲日野ハ稲飯野ある

可し和名抄ホハ印南郡と一郡ホ立て有れども續紀
天平神護元年五月條ホ吉備彦之苗裔云こ於難波高
津朝廷家居播磨國賀古郡印南野と有て古ハ賀古郡
の内ありしある續後紀ホ承和六年二月癸丑朔戊寅
播磨國印南郡佐突驛家依舊建立越前國氣比大神宮
云こと有て稲日野の氣比神社ホ由縁有を思ふホ古
事記黒田盧戸宮段ホ於播間氷河之前忌瓮而云こと
有ハ今賀古川と云河の古名ある印南野ホ傍て流
るれば氷河ハ飯河ある(イヒカハ)も知べりしず又神名式ホ
賀古郡日岡坐天伊佐比古神社御在し坐る飯岡(イヒヲカ)ホ

る可くや氣比ハ笥飯なるに就て稲日野と云事の聞過ぎ難きに依て此に云なり（右の日圖社を峯相記に云ハ彦命と記せり）古事記訶志比宮段に於高志前之角鹿云に坐其地伊奢沙和氣大神之命云に有を氣比大神の御事と爲るハ誤傳なり其ハ氣比神社の摂社に伊佐に別神社有る是なり社傳に保食神の荒魂を應神天皇の祭給ふなりと雖も予が說ハ別なり神功皇后十三年御紀の傳に就て註す可きなり次に又式に但馬國城崎郡氣比神社有り今氣比村の西方絹巻山に立せ御在す坐す光孝天皇實録に仁和元年二月十日授但馬國正六位上絹巻神從五位下と有る是なり如此く其地名に寄へ氣比村と云るハ次縁の事に ハ非ず決めて淡路より播磨を經て丹後に鎮坐す迫

の間に令坐奉りし所なるにこそ（其ハ但馬一覽記と云物に大物主神倉稲魂命大己貴命次彦名命天日方命五神淡路島より此國へ人民を引連て出顯坐て瀬戸の湊を切開き大河を通し給ひしかば洪水盡く流盡て平土と成れしハ山野を燒て驅給ひしかば蛇龍ハ遁去て害を成す事も無く倉稲魂命百穀を播こし民に五穀を作る事を教給ひて人民繁昌國家太平なりと云くと云るハ入混ひたる傳なれども據として說を成す）此儲右に云る越前の氣比神社七座（並名神大）ハ其後に鎮坐けるにして其も神代なりの事なる可く且原が八幡本記に社家の說に云傳ふるハ保食神上古なり此所に鎮坐ましけるなるに推古天皇の御宇に仲哀天皇の託告有て角鹿郡天筒峯に鎮坐有り文武天皇大寶二年今の所に宮柱太敷立

て遷坐成〳〵奉る保食神と同殿に鎮め祭り其を氣比
大神と云ふ即今の本宮是なりと有り其七座と云ハ
本宮三座東保食神中伸哀天皇西神功皇后東殿日本
武尊摠社應神天皇西殿武内大臣平殿玉妃命右四座
在本宮之四隅と社記に云り然れハ神代より保食神
ハ御在〳〵坐るにて其筍飯大神と称奉るハ其神にあ
ら御在せりける猶此御社の摠ての御事ハ神功皇后
御紀の傳に註す可きを此ハ筍飯大神と申すハ保食
神に御在〳〵坐す御事を云明〳〵め奉るもとてるり傳九
巻三十五丁に云る如く神名式に紀伊國伊都郡丹
生都比女神社名神大月次新嘗と有を古くより高野

内閣文庫
内閣文庫
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan